

る國はなく、正倉院は實に世界の寶藏といはれてゐる。

〔唐朝〕 西曆六百十八年唐の高祖、隋を亡ぼし、長安に即位してより、二十代哀帝に及び九百七年、全く朱全忠に篡奪さるゝまで二百八十九年の長き朝廷であつて、制度、文物よく備はり、美術興隆して、いはゆる物質文明は支那空前の發達をなした時代である。

〔隋〕 西曆五百八十一年北朝に於ける、北周の外戚、楊堅、北周を篡ひ帝位に即き長安に都し、文帝と稱しその子明帝(煬帝)次いで即位したが、六百十八年に至り李淵(唐の高祖)に亡ぼされ、僅かに三十七年にして亡びた朝廷であつて、全く、南北朝時代より唐朝へと移る、短い中間の朝廷であつたのである。

〔過渡期〕 一時代から、他の時代へと移るその推移の時期をいふので、過渡時代といふに同じ。移り際。

〔唐朝式〕 勿論、これは美術の上にいふので、唐朝風といふこと、即ち、唐朝風の美術といふことである。

而して唐代は非常に強盛を致した時代で、西域諸國をも征服し、爲に自然西方との貿易も起り、又、玄奘、義淨等の高僧の渡天するもの多く、隨つて、印度文明

の東漸を見るに至り、六朝時代に於て既に盛んであつたその佛教美術は、益々榮えて隆盛を見るに至つたので、正に佛教美術の爛熟期であつた。故に前の六朝期は、美術史上からいへば、この爛熟期に對する黎明期ともいへるのである。依つていはゆる唐朝式の美術のいかなるものであるかが想像出來よう。

〔調度〕 漢字本來の意は、程よく物事をはかる義であるが、邦語としては、手まはりの小道具といふ意で、これを武家に於ては弓矢の稱であつた。今は日常の道具に用ひる。

〔風潮〕 風に從ふ潮のながれ、延いて世間のなりゆき、時勢のおもむき。

〔風靡する〕 風が草木をなびかすやうに、威力(ここでは支那思想)を以て民を(ここでは我が國の思想界を指す)なびかせ従はしめることをいふ。

〔蒙昧〕 物ごとの理にくだらぬこと。蒙も昧も共に「くらし」といふ意で、愚昧などといふに同じである。

〔平安時代〕 桓武天皇(第五十代)の延暦十三年(十月、都を長岡から京都(平安京)に遷す)から元暦元年、源賴朝が鎌倉に幕府を開いたまで、凡そ四百年の

間の稱。また王朝時代ともいひ、藤原氏が天皇を補佐し參らせてゐた時代だから藤原時代といふ語も用ひられる。

平安朝の初期は云々は前の推古朝や、奈良時代を支那文明の輸入時代といふならば、この時代は、支那文明を十分に咀嚼し、新たに國粹的文明をつくつた時代ともいへるといふことである。特に美術工藝は支那の模倣からはなれて、我が國固有の優雅な特色を發揮した。

〔その頃から國文學が起つて〕 平安時代の文學は我が國の國文學が始めて盛になつた時代ゆゑ自ら後世の模範文學と見做され、世間には國文といへば専らこの時代の歌文と心得てゐる人がないでもない。古今集、伊勢物語、土佐日記、後撰集、拾遺集、源氏物語、枕草子、榮華物語、大鏡、今昔物語、後拾遺集、今様、朗詠等すべてこの時代が、いかに文學の黄金時代であるかを語るものたらざるはない。

〔鎌倉時代〕 元暦元年、朝頼が鎌倉に武家政治の機關を設け、幕府を開始してから、源氏三代、北條九代、約百五十年間、政治の中心が鎌倉にあつた時代の稱。即ち元弘五年三月、北條氏の滅亡をもつて鎌倉時代の

幕を閉ぢる。

〔搢紳〕 搢は「はさむ」であり、「紳」は束帯の時につける大帯であつて、即ち高貴の人が束帯を着けた時、笏はその大帯にはさむといふ意から轉じて、直ちに高貴の人、官位の高い人の意に用ひる。貴人。貴顯。

〔普遍的〕 普遍はあまねく、ひろく行きわたる義であり、的は「の」であつて、一般的といふのと同じである。

〔定朝〕 平安朝の初期、藤原時代に於ける佛師としての實に一世の大家で、その生年は明らかでないが、一條天皇の頃より三條、後一條、後朱雀の代を経て、後冷泉天皇の天喜五年八月一日歿したのである。父は僧康尙といひ、やはり有名な佛工であつた。定朝は父の技を繼いだもので、藤原道長の法成寺を建立するや命をうけて、その本尊である三丈二尺の大日如來及びその左右に立てる二丈の釋迦、藥師、外に文殊、彌勒、梵天帝釋四天王等の諸像を作り、後一條天皇より大いにその技を賞され、法橋の位を受け、更に法眼に進み京都の七條に住み、いはゆる七條佛師の祖をなした人で、他に鳳凰堂の本尊など、多くの大作を残してゐる。

る。

〔運慶〕 鎌倉時代に於ける佛工の一大巨匠であつて、平安朝に於ける定朝法眼の六世の孫にあたる。後鳥羽天皇頃の人である。東大寺佛師職に補せられ、備中法印といふ。始め藤原基衡のために、平泉寺の薬師、十二神將の像を作り、後頼朝に召され、大倉新御堂及び持佛堂の佛像を造つて、その靈腕を認められ、巨匠の名を恣にしたのである。而して、その作中、東大寺南大門の二王、東福寺の十六羅漢、高野山遍照院彌陀三尊、興福寺世親無著兩像等は最も有名である。なほその作風はいはゆる鎌倉時代風の雄偉、剛健の時代色が最もよく表されてゐるものである。又運慶は畫慶にも作る。

〔湛慶〕 運慶の子であつて、後鳥羽天皇の頃より後深草天皇の頃までの人で、八十歳以上の高齢で歿した人であるが、歿年は明らかでない。早くより彫刻の技を祖父康慶、父運慶に受け、實に鎌倉時代に於ては、父につける名工であつた。また佛畫をもよくして、法印大和尚に叙せられ、又父運慶と同じく、東大寺佛師職となつた。その作中、高野山金剛力士像二體、蓮華王

院中尊像等が最も有名である。

〔純鑑賞的〕 鑑賞は事物の善惡を鑑へ味はひ樂しむことをいふので、純鑑賞的といふのは、それが純粹の鑑賞のためといふこと、鑑賞本意のといふ意。即ちほんたうに味はひ樂しむためのといふ意。

〔大和繪〕 「大和繪」を説明するには、「から繪」から説く必要がある。元來、大和繪といふ稱は、「から繪」に對するのであるが、「から繪」といふのは推古時代に輸入された六朝式の繪、天平時代の唐風の繪、又は東山時代の宋元の畫風等各時代を通じて支那から傳つたが、當初のものは常に支那そつくりのもので、これを「唐繪」——「から繪」といつたに對し、日本趣味の加味された繪を「大和繪」といつたのである。而して、それは、何時の頃から生じたかといふと、平安朝の初期から生じ始めたものである。その始は、奈良朝に於ける唐風のもの、平安朝に入つて、巨勢金岡、宅麿爲成等を先づ過渡期の人として、春日基光、藤原基光、藤原隆能より始まつた土佐派に至り、全く日本趣味の畫風となつた。宗教畫や山水畫よりは寧ろ、歴史畫風の繪となり、その特色を繪卷物等に於て發揮するに至つ

ものである。詰り「大和繪」とは、この土佐派を中心とした、當時の日本趣味の繪をいふのであるが、この土佐派も鎌倉時代を経て、室町時代に至つて漸く衰微したのである。で、鎌倉時代の繪畫について一言すれば、當時榮えてゐるのは土佐、春日等の流派であつた。主として繪卷物が描かれ、その中の不朽の逸品が多く残つてゐる。院政の頃の藤原隆能は土佐派の人で、源氏物語繪卷を、鳥羽僧正覺猷は信貴山縁起繪卷を描いた。共に當時の傑作で麗麗なものである。僧正は又墨書で鳥獸戲畫を描いた。鎌倉時代になつて藤原隆能が出た。肖像畫の大家で頼朝の像などはその大作であつた。住吉慶恩の平治物語繪卷は運筆が雄健で色彩の配合がよく、人馬の活躍するさまは眼のあたり戦亂を見るやうである。土佐長隆の蒙古襲來繪卷はこの役に戦功のあつた竹崎季長の依頼によつて描いたものであるといはれ、我が軍の奮闘のさまを最もよくあらはしてゐる。

〔足利時代〕 鎌倉時代の次に吉野時代が續き、それから、足利時代となる順序である。足利時代は、天授四年、足利義滿が幕府を京都室町に開いてから（これが

室町時代の稱の出來た所以）天正元年、信長が天下を定めるまで、十三代、凡そ二百年間の稱。この時代の文化の特質は、鎌倉時代の剛健な所へ平安時代の優美な特質を折衷し、新に宋明の文化の幾分を加味した點にある。その結果は一種滋味のある、小じんまりした消極的なものができた。その繪畫にあつては大和繪には僅に土佐派のみ残り、他は悉く衰へてしまつた。そうして漢畫が急に大發達をなしとげた。義持の頃如拙、明兆が出た。明兆は兆殿司と呼ばれ、佛畫には古今獨歩の名手であつた。如拙の後に周文が出た。周文の門の雪舟は明に學び、山水を寫生して歸つたが、その風景畫は實に千古の妙筆といはれてゐる。雪舟と同時代に狩野正信が居つた。畫道で義政に仕へたが、その子古法眼元信は土佐吉信の女と結婚して大和繪と宋元の支那畫とを折衷して別一派を開いた。即ち狩野派といはれたものである。この後狩野派は代々名手を出して永く榮えた。宋元畫は水墨を主とし、彩色の少い淡泊な畫であるから、滋味を愛する時代精神の産物としてかく多くの大家を出したのである。

〔宋元の水墨畫〕 支那の宋代や元代に於ける墨畫と

たいふことではあるが、一體宋代は佛教と道教とを參酌して儒教を解釋せんとしたいはゆる、宋學の起つた時代である故、繪畫の方面にも、形似傳彩を超越した佛教殊に禪學的な心持や道教的な哲學的な氣を表さうとしたいはゆる、氣韻生動を重んじた墨描きの山水畫が頗る盛んであり、元代も、又これが延長とも見るべき畫風が盛んであつたのである。宋元の水墨畫とは即ちこれをいふ。

〔禪宗趣味〕 禪宗とは、佛教の一派であつて、一に、佛心宗ともいひ、釋迦が大梵天王の請ひに依り、四衆を集めて說法せる時、先づ、一枝の華をとつて四衆を見渡したるに摩迦訶葉のみ獨り破顔微笑してその意を會得し、釋迦よりその法を傳へられたといふことから起つてゐる宗派である。教外別傳、不立文字といつて教典などに依らず、心に依つて直ちに佛心を得るの法で、その訶葉の二十八世の法嗣達磨が先づ支那に傳へ僧榮西、宋へ渡り、後鳥羽天皇の建久二年（一八五一）歸朝してこれを我が國へ傳へたものである。後、又僧道元宋に渡り、後堀河天皇安貞三年（一八八八）更に一派を傳へた。而して、前者を臨濟禪、後者を曹洞禪と

いふ。詰り、「禪宗趣味」とは禪宗の趣とか「禪宗の氣分」又は「——の味はひ」といふこと。

〔如拙〕 「如雪」「亂芳軒」又は「幽秀」ともいひ、足利三代將軍義滿の時代の人であつて、もと九州の人。京都相國寺の僧となり、畫をよくし、義滿の寵を受けたといふ。後の東山時代の畫の開祖の如くに仰がれてゐる人であるが、その眞蹟と傳へられてゐるものは、京都妙心寺退藏庵にある「瓢鮎圖」といふ一幅があるばかりで、何故にかく仰がれてゐるかは不明である。が、その門下に周文があり、更に雪舟などを輩出せしめたためであらうといはれる。

〔周文〕 如拙と殆ど同時代の人で、その弟子といはれてゐる。初めは近江の國の永源寺にゐるが、後は如拙と同じく相國に住した僧で、號を越溪といひ、別號を岳翁、春育、等溪等ともいつたといはれ、いはゆる北宗畫をよくした人である。

〔雪舟〕 北宋畫の大家で禪僧である。俗姓は小田氏、名は等揚、應永二十七年、備中國都宇郡赤濱に生まれ幼時附近の寶福寺といふ禪刹に入り僧となつたが、天性畫を好み、僧にして經を好まなかつた。後、京都に

上り、相國寺に入り、洪徳禪師の弟子となり、更に鎌倉に下つて建長寺に入り玉陰永瑛といふ僧に就いて學んだのであるが、應仁二年足利氏の遣明船に従つて明に渡り、支那禪刹五山の一なる四明天童寺に上つて熱心修學し、渡明のその年に於て既に禪班第一座となつた。又畫も張有聲、季在の二家の教をうけたが、重に自ら山水を友として畫筆を磨いたといふことである。歸つて京都に居を定めたが、戰亂のため去つて九州の地を廻り、後周防の山口在の雪ガ谷に、雪谷庵を營みここに久しく住し、更に去つて、石見の益田（美濃郡）の附近なる大喜庵に住し、後奈良天皇の永正三年八十七歳にして永眠した。後世彼の流派を雲谷派と稱してゐる。その畫は最も山水に長じ、筆致に禪味があつて茶人の賞翫が特に厚い。實に雪舟の前に雪舟なく、雪舟の後に雪舟なしといはれてゐる、眞に一世の鬼才である。

〔狩野派〕 日本畫の一派。支那の北宗畫より出で剛健な筆致を用ひて多く漢土の山水人物を畫く。明應の頃狩野正信がはじめ、その子元信（古法眼）は絶世の大家と稱せられるに至つた。江戸時代になつてその家中

橋、鍛冶橋、木挽町、濱町の四流に分れ何れも代々幕府に仕へその繪所となつた。駿河畫家も亦その一派である。鍛冶橋の守信（探幽）は中興と稱せられ、次いで木挽町の常信の名が最も高かつた。この一派は江戸時代に門閥を以て世間を睥睨し、門流その苗字を名乗り家を立てるものが少くなかつた。明治になつての大家狩野芳崖、橋本雅邦も、もと木挽町に學んだものである。その畫風は勿論、周文、雪舟等の勁拔な北宋畫の筆致と土佐派の如き大和繪風の筆致とを取入れたものであつて、最も高雅な畫風である、大體に於て、北宋畫に屬する畫風とされてゐる。

〔曾我〕 曾我派といふことで、これも室町時代に起つた畫の一派であつて、その祖は曾我蛇足といつた。蛇足は明より歸化し、越前の朝倉家に奇遇し、曾我氏の婿となつた李秀文の子であるといふ。應仁、文明時代の人で名を宗譽、通稱式部といひ、後禪髮して夫泉、又は宗文ともいつた。京都紫野大徳寺の眞珠庵に住し同じく大徳寺の高僧、一休にも畫を教へたといふ。文明十五年十一月十七日に歿した。その畫風は、筆力が頗る豪放で、しかも、氣韻蕭疎、最も花鳥山水畫をよ

くした。即ちこの風を傳へた畫風を會我派といふのである。

〔雲谷派〕 これは雪舟の歿後、その風を慕ふものが、雪舟派と稱するに依つて起つた流派である。然し、その畫風が雪舟の畫風であることはいふ迄もない。而して雪舟の死後、雲谷庵にはその門人秋月が住してゐたが、後、雲谷等類なるもの、秋月に繼いで雲谷庵に住し、雲谷庵三世といひ、雪舟派即ち、雲谷派を世に唱へたのである。元來、等類は肥前の人で、姓は源、治平と稱し、始め狩野永徳に學び、後、雪舟の風を慕ひて、その風を學び、雲谷庵に住し、その庵號を以て氏とし、雲谷等類と稱し偶々毛利輝元、雪舟の筆意を傳ふるものを求め、等類これに應じて大いに著れ遂に雲谷派の祖といはれるに至つたのである。即ち雲谷派は廣い意味に於ては凡て雪舟の畫風に屬する派をいひ、狭い意味に於ては等類を祖とするいはゆる雲谷派をいふのである。なほ等類は天正の頃を最も盛とした人である。

〔水墨減筆の一體〕 畫法的一種で、薄墨を用ひ筆筆を疎く使つて描く日本畫法をいふので、足利時代から

盛んになつたが、要するにこの法は、當時盛んであつた禪若しくは老莊の趣味より幽玄の心持を表さうとして起つた一派である。

〔戰國時代〕 足利時代の末期に於て、群雄四方に割據し、互に争攻して天下一日も寧日なかつた時代をいふので、大體、應仁の亂以後、幕府の滅亡迄、即ち天正元年(二二三三)信長將軍義昭を逐ひ、天下の覇權を握るに至る凡そ百十年程の間をいふ。

〔下剋上〕 「下上に刻つ」であつて、下々の者が漸々に勢力を得て、從來の上に立つ者を壓するをいふ。

〔關白太政大臣〕 太政大臣にして關白たるもの。而して「關白」とは攝政に非ずして天皇の政、即ち萬機に關り白す人をいふ。太政大臣は太政官にて最高の長官職掌なく天子の師範として四海の儀形であつた。適任者でなければ缺員とする制で、則ち關の官ともいつた。我が國に於て、太政大臣にして、關白たりしは、宇多天皇の御代に、藤原基經の任せられしを以て始めとする。

〔徒手空拳〕 徒手も空拳も同不同意で、「からて」「すで」といふ意。

〔天真爛漫〕 「天真」は、人間的な不純な心持のまじつてゐない自然のまゝといふこと。「爛漫」は、物の満ちて外に溢れ露れるさまであつて、「天真爛漫」といへば自然そのまゝをあらはすこと。

〔極彩色〕 極めて精密に濃厚に施したる彩色をいふ。單に、「はで」とか濃厚とかいふのではない。

〔風俗畫〕 時代時代の風俗を對象にして描いた畫をいふ。

〔安土桃山時代〕 信長と秀吉の時代をいふので、正親町天皇の天正元年(二二三三)織田信長足利幕府を倒し、近江の安土に城を築き覇權を握り、天正十年本能寺に於て明智光秀に殺される迄、僅か十年の間を世に安土時代といひ、その年、秀吉が光秀を山崎に亡ぼし天下に號令してより、慶長八年(二二六三)家康征夷大將軍を拜し、幕府を江戸に開く迄約二十年の間を桃山時代といふ。而して桃山時代とは、秀吉が伏見(桃山)に聚樂第を營み榮華を極めたるに依る。而も、兩時代を通じて僅か三十年。この時代は建築といひ、繪畫といひ、工藝品といひ、風俗といひ、自ら豪放で潤達なものであつて、西本願寺の唐門、書院、飛雲閣、大徳

寺や豐國神社の唐門などは聚樂第や桃山城の遺物であるが、室町時代のやうな地味な所がなく、積極的に思ふ存分にやつてみるといふ時代精神が、よく現れてゐる。又繪畫や彫刻が盛んに建築に應用せられた。繪畫は狩野派や永徳、山樂が出て、桃山城や聚樂第の襖や屏風にその勇健な筆を揮つた。構圖の雄大、彩色の豊麗なる點にその特徴が見え時代精神がひらめいてゐる。彫刻には左甚五郎などの名人が出たのも、この時代である。

〔日本の文藝復興〕 「文藝復興」とは歐洲に於て希臘羅馬の衰微後、基督教に拘束せられ全く衰へたる文藝美術を古代希臘羅馬時代の如き自由な生氣あるものにかへさうとする運動が、文藝に於ては、イタリーのダント(二二六五—一三二二)ベトラルカ(一三〇四—一三七四)ボッカチオ(一三二三—一三七五)等に依り又美術に於てはミケランジェロ(一四七五—一五六四)ラファエル(一四八三—一五二〇)等の人に依つて十四世紀頃起されたのをいふのであつて、ちやうど桃山時代の美術は西歐に於けるその運動にも等しいものであるといふ意から「日本の文藝復興」といつたのである。詰

り奈良朝以來發達して來た美術は自然と基本的になり型にはまつて來た傾向を、桃山時代に於ける粗朴で豪放な美術(最も建築に於てよく表されてゐる)は實にその行き詰つた傾向を破るものであつたのである。

〔江戸時代〕 足利時代の次に安土桃山時代が來、それから江戸時代に移る。慶長八年徳川家康が幕府を江戸に開いてから、慶應三年、慶喜が大政を朝廷に奉還するまで、十五代凡そ二百六十年間の稱。この時代は漢學(つまり儒學)に、國學に、蘭學に、學藝はいやが上に隆盛を來し、一方民衆は淨瑠璃に、小説に、俳句に、俳文に、狂歌に、狂句に、狂文に、川柳に、文字通りの黄金時代を形づくつた。美術方面にあつては建築彫刻はあまり振はず、ひとり繪畫だけ榮えた。狩野永徳の孫に探幽が出て海内一の譽を得、幕府の繪師となつた。その後一族門派に名人が多く出で畫界に覇をとへた。また土佐派には光起が出た。院政期の光長と東山時代の光信と並べ稱して土佐の三筆といはれてゐる。しかしこの後土佐派は振はなくなつた。家光の頃には本阿彌光悦が出て繪畫時繪に名をあげたが、同じ系統に俵屋宗達が出、この頃には尾形光琳が出て

同じく繪畫時繪に巧であつた。光琳の繪は豪華壯麗な裝飾的繪畫で、彩色の絢爛なる、意匠の奇抜なる、永く斯界を獨歩してゐるのである。一方平民趣味の發達につれて、時代風俗を描く浮世繪が起つた。その創始者は岩佐又兵衛といはれてゐる。元祿の代となつて江戸に菱川師宣、英一蝶、京に西川祐信が出て浮世繪に名をあげた。(浮世繪の項参照)一方支那の南宗の畫風を傳へた人に池大雅、與謝(谷口)蕪村あり、やゝ後に渡邊華山が出た。圓山應舉は日本畫界の寫實主義の先驅ともいふべき人で、人物花鳥すべて實際の事物について觀察し寫生せねばならぬと主張した。この一派を圓山派といつた。松村月溪はこれから別に四條派を開いた。これから獨立して伊藤若冲、谷文晁があつて一家の風格を具へてゐた。殆ど猿ばかり描いた狙仙といふ者も有名である。又司馬江漢は長崎へ行つて蘭人に畫を學んで西洋畫の一派を開いた。以上はその概要である。

〔餘澤〕 後に残されたる惠。ここは「おかけ。」

〔爵然〕 草木の盛んに茂るさま。又はそのやうにさかんなるさまにいふ。

〔燦爛〕 あざやかに光り輝くこと。美しく輝く。

〔光悦〕 本阿彌光悦であつて、徳川三代將軍家光時代の人の、頗る多趣味、多藝の人であつた。一體、本阿彌家といふのは、吉野朝時代の公卿に従二位五條高長といふ人があり、その庶子に長春といふものがあつて尊氏の叔父なる日靜上人の歸依し妙本阿彌陀佛の法名を得てより、その本阿彌を家名とするやうになつた家柄で、而も長春が刀劍の鑑識に長じてゐたから世々、刀劍の鑑識を家業としてゐるのである。光悦は近江の多賀宗春の子で本阿彌光心の養嗣子となり、幼より書をよくし、近衛信尹、松花堂昭乗と共に世に三筆といはれた程であり、畫は狩野永俊に學び、茶道は古田織部重勝に學び、(後には應ヶ峰の麓に大虚庵といふ茶室を造りここに隱退した)更に能面も作れば樂焼もやるといふ多藝さで、號を從友齋、自從齋、大虚庵などと號し寛永十四年二月三日に歿、年八十、或は八十一、八十六。しかし、その畫は應用畫といふべき裝飾風、乃至は模様風の趣を有してゐる中に、一種獨特の畫風を有つた畫で、後に光琳風といはれる流派の祖をなしてゐる。

〔宗達〕 野々村宗達又は俵宗達といふ。傳記は不明な人で、生地は加賀又は能登といはれ、暫く京都に出て畫の修業をし、晩年金澤に歸り、寛永二十年八月十二日六十八歳で歿したのである。なほ宗達は光悦より歳下でもあらう。又光悦の従妹婿といふ姻戚關係にもある故、光悦の指導を受けたらしい。家が豊かであつたためか、金に飽かせて贅澤な繪を描いた故、自然その畫風が頗る豪快で華美なものとなつたのであらうといはれてゐる。

〔光琳〕 尾形光琳である。光琳は東都の呉服商尾形主馬の二男で、乾山燒で有名な尾形乾山の兄である。名は惟富、字は伊亮通稱を市丞といひ(藤三郎といふは誤り)號を方祝、道崇、寂明、長江軒、青々堂等といふ。幼より畫を好み、後江戸に出で狩野安信又は常信ともいふがその何れかに就て畫を學び、更に古土佐の風を學び、次で光悦の風を學びその天才を大成したのである。而してその畫風は模様風な頗る華美な風で、宗達より繪具の使方が精巧である。殊に時繪の方法をよくし、漆器中に鉛錫、青目等を嵌入し又は金銀泥を用ひて、いはゆる、光琳時繪を造つて世に大に著れたの

である。即ち、その詩繪の模様は光琳畫の筆致を表してゐるものである。後に法橋に敍せられ、享保元年六月二日に歿した。年五十九、又は七十六といふ。墓は京都小川頭妙顯寺内本行院にある。

〔抱一〕 酒井抱一である。抱一は播州姫路城主酒井忠仰の二男、寶曆十一年七月、江戸下屋敷で生まれた。幼名を前次、後に柴八郎諱を忠因、號を屠靜、管村、兩華庵、輕舉道人等といふ。寛政九年即ち三十九歳の時、築地本願寺別院に於て得度し、等覺院と號し、權大僧都となつた。幼より畫を好み、先づ歌人豊春に就いて浮世繪を、又は明畫の宋紫石の風を、或は狩野高信に就いて狩野派を、京都に上つて土佐光貞に土佐派の風を、圓山應舉に従つて圓山派を學んだが満足するに至らず、再び江戸に歸つて光琳の風を慕つて、遂に畫法を大成したのである。その風は、光琳などよりも更に美しい畫風で、華美といふよりは寧ろ絢爛で、緻巧精緻を極めたものである。殊に繪具なども頗る吟味したものを使つたもので、繪具屋が胡粉などでさへ抱一の御用として特別に製したものであるといふ。文政十一年十一月歿した、年六十八。

〔醇化〕 てあついで教の感化の意であるが、こゝは純化の意で、まじりけのない、純粹にすること、即ち純一の意。洗練すること。

〔江戸趣味〕 江戸時代の趣味といふことで、その趣味はいふまでもなく、平民趣味とか若しくは民衆趣味をいふのである。また江戸時代の風俗文物に憧憬を持つ心をいふ。

〔浮世繪版畫〕 版畫は木版ずりにした畫をいふので、木版ずりの浮世繪の意。浮世繪は時世粧を描いた畫。一名を當世繪。浮世は今様、當世と同義で、古土佐の畫も當時にあつてはまた浮世繪であつたことは勿論であるが、特に浮世繪といへば中世末期より江戸時代の初期にかけて江戸の岩佐又兵衛、懷月堂等に起つたものの稱。元祿に至り菱川師宣、英一蝶、鳥居清信あり宮川長春これに次いで彩色に巧であつた。後に京都の西川祐信あつて拮抗したが到底江戸の盛んなのは及ばなかつた。江戸には鈴木春信に至つて發達し、尋いで關清長、北尾重政、喜多川歌麿等が三幅對の觀あり殆ど同時に歌川派に豐國が出で、葛飾北齋は別に一派をなした。豐國の門には、國貞、國芳があり、又廣重

は主に山水を描いた。明治に至つて月岡芳年の名が獨り高かつたが、後世は嗣ぐものなく衰へた。

〔平民の藝術〕 貴族の藝術、堂上藝術に對して、平民一般の人々の手になる藝術。

〔圓山派〕 圓山應舉の始めた畫風で極めて寫實的な忠實な描寫を專一とする畫風である。應舉は、丹波の農家の子で、享保十八年五月に生まれ、幼より畫を好み十七歳の時京都に出で、石田幽汀に學び、後、支那畫家、特に明の仇英、唐寅、元初の錢暉等の畫法及び西洋畫の趣味をも研究して、遂に一派をなしたものである。寛政七年七月十七日、年六十三にて京都に歿したのである。なほ應舉は初め、名を氏、字を仲選、又は仲均といひ、僊嶺、一嘯夏雲、洛陽山人等と號した。

〔四條派〕 京都の人松村月溪(吳春)の初めた畫風で、圓山派の寫實趣味の筆致に似て南畫の心持を混じた線の太い雅致のある畫風である。而して、月溪は寶曆二年に生まれ、名を春、半伯望、允伯、又は存伯と號し、通稱を嘉右衛門といふ。初め、望月玉蟾に學び、更に、大西醉月に就き、又與謝蕪村に就いて、俳道及

び南畫を學び、後應舉に學ぼうとしたが、應舉固辭して門に入るを許さず、然し、以後親交を結び、天明八年の火災應舉と同居し、その奥義を得たといふ。文化八年七月十七日歿、年六十。なほ、月溪が京都四條通東洞院の東に住んでゐたため、その派を四條派といつたのである。

〔西洋の畫風〕 司馬江漢は西洋の畫風を學んだ。(前項江戸時代の美術を参照)。

〔南宗派〕 その源流を尋ねると、昔支那の唐の時代に王維、李思訓といふ二人の名畫家があつて、王維の方は好んで大江平遠な趣を有する支那南方の山水を畫き、李思訓は好んで岩石嶙々たる支那北方の山水を畫いたもので、これを禪宗に南宗、北宗のあるに倣つて王の流派をば南宗畫といひ、李の畫法をば北宗畫といつたのである。而して、我が國に於ても、雪舟や狩野派の如き嶙々たる山水などを畫いたものを北宗畫又は北畫といひ(室町時代は主に北畫)徳川に至り文化文政頃の文人墨客好んで柔かな山水を畫いたために、これを南宗畫又は南畫といひ、祇園南海(木下順庵の門人)をその始めとしてゐる。以て、我が國の「南畫」は

「文人畫」に通じてゐるのである。なほ「徳川時代の」項参照。
 「文人」^{ぶんじん} 詩文、書畫など、文雅のことにたづさはる人をいふ。

「國民性が國土の恩恵に支配される云々」例へば我が國の如く氣候は温和であり、山川は秀麗である。花紅葉四季をりく風の風景は誠に美しい。かういふ國土の住民が天地山川を愛し自然にあこがれるのは當然である。日本娘の着物の模様のはでやかなのは秋の野の美が自然に染められたのである。昔のしのぶのすり衣を始め、菊や梅や牡丹を大きく染出した友禪模様又は櫻色、山吹色等の色の名稱、或は日常の食物の名稱、お萩、牡丹餅、松風、磯松、洲濱、落雁、菊正宗、櫻正宗、更に漆器陶器一切の美術工藝品が草木花鳥の繪であることはもとよりいふまでもない。以上のやうに繪畫、美術工藝品はいふに及ばず、日常の衣服、器具の模様から、飲食物の名稱や形、非常時の戦具にまでが自然美と調和してそれがあらはれてゐるところが、我が國民性の特色である。

「脈絡」 すぢみち。又は道理、關係などの意。ここは

關係がよくあたる。

鑑賞批判 本課は扱方に於ていつたやうに、小さい我が國の美術史である。従つて、生徒をして我が國美術の變遷の概要をしっかりと把握させ、併せて、その底に流れる一貫した國民性を知らしめるといふ事に全力を注がねばならぬ。その爲には本文の記す所をよく玩味させ、また用意した各時代の各名家の美術品の寫眞や掛圖について十分これを鑑賞させ、本文の記述を單なる丸暗記でなく、事實の上から理解させねばならない。かうして一通り本文の記述を自分のものとした上に、本文の前後に述べられた、作者の美術鑑賞の態度、我が美術の國土、國民性との相關について考へしめたい。日本美術の變遷と國民性との關聯、また一般美術鑑賞の態度、これ等を併せ得るのは、一に本文の忠實なる理解にまつ。こゝに重點を置いて教授されたい。

参考 ごく簡潔に、日本の美術（繪畫）史の思潮を記した笹川博士の文を擧げておく。

美的國土に生れた國民であるから、その昔より藝術好きの國民であつた。この國民の手によつて作られた藝術は、國民氣質をうけていはゆる日本藝術を作り出した。

他の文化と同じく、外來藝術の傳來によりて、我が藝術の花が開いたものであるが、同化力の強い我が國民であつたから、之を化して日本の藝術を樹立したのである。されば繪畫の如きも、佛教の傳來ありて始めて観るべきものがあつた。國有の繪畫としては、土器その他の器物等に畫き刻んだ模様畫もあつたが、此等はまだ十分に發達するに至らず、又織縫等の技術も韓土との往來があつて發達して來たのである。従つて繪畫の應用もあつたらうが、之といふべき程の觀るべきものはなかつた。然るに佛教の渡來ありて、俄に繪畫の發達を促進し、畫工の來航もありて、信仰の對象なるものを描き出し、繪畫としては殆ど概ね佛畫を作つたのである。しかし繪畫の發達と共に、純粹繪畫も作る事となり、自然の景象、時代の好尚をうけ、國民の同化力で次第に日本の繪畫を描き出す事となつた。土佐派の描ける所の山水は京畿の山水で、平安朝の泰平の氣象は旺盛として其巻繪物若くは畫幀の裡に現れ、優美なる時代の風は自らその傳彩運筆の間に搖曳してゐる。其後支那宋元時代の繪畫が東山時代に渡來した所が、之は従前の倭繪即ち土佐派の繪畫と全然其行方を異にしたものにて、其影響は淡素にして、

情靈を喜ぶの畫風を創め出した。氣韻の生動を尙び、潑墨の妙を旨とし、超俗の趣致を毫端に屬するを以て其特色としてゐる。恰も鎌倉以後我邦に傳來した禪宗が死を視ること歸するが如き武士道と相容るゝものあつた時であるから、宋元の繪畫は此好尚に投じ、方外の人は好んで之を描き、一代の風は之に奔るといふ有様であつた。其後土佐と宋元畫風との調和歸一を謀るものありて、桃山時代より江戸時代に至りて漸く圓熟の境に入り、此時代があらゆる點に於て國民の自覺を促したるは、恰も平安朝の如くに此に獨立せる日本畫風を起した。しかし江戸時代の文化は平安朝のそれと異り、平安朝が貴族的文化なりしに反して、江戸は民衆的文化であつたが爲に、藝術界も獨り一二派の獨占を許さずして、あらゆる流派あらゆる方式の繪畫を作り出し、千紫萬紅の奇觀を呈した。明治は江戸末期の衰微したる其餘を受けて、其初め觀るべきものもなかつたが、外來の西洋畫に影響せられ此に新しい繪畫を起し、今猶混沌として大正時代に入つたのである。（日本繪畫史）

一六 國土と愛國心

姉崎 正治

【扱方】 國土と愛國心との關係を述べた一文である。美しい國土がいかに高く強い愛國心を養成するものであるかといふ觀點から、審さに我が日本人の愛國心の依つて發生した所を検討し、更に國土の美を取扱つた文字もまたいかに愛國心を刺戟するものであるかといふ事實にまで論及してゐる。我々は我が國土が多くの美觀に恵まれてゐることを知つてゐる、また古來その美觀を讀へた多くの文學のある事を知つてゐる——現級までに國語科に於て、かなりそれ等は學んで來た所である。——この二者が、一見格別の關聯もなささうな我々の愛國心と、いかに密接な關係があるかを、本課は遺憾なく闡明してゐる。我が國土の美に今更新しい目を向け、それを讀へた文學の國民心理に及ぼす影響を考へ、我が國民が世界の何れの國民よりも愛國心の熾烈な理由をはつきりと理解させ、更に愛國心の向上、醇化に資せしめたい。扱方としては、別に補説はいらぬと思ふから、本課の所説を

丁寧には味はせ、殊にその心理的推論の經過については十分に注意、考察せしめ、味解せしめるやうにされたい。

【教授】

作者

姉崎正治 アネザキマサル

宗教哲學者。文學博士。嘗て嘲風と號した。明治六年京都市に生れ、明治二十九年東京帝國大學文科大學哲學科を卒業し、後、歐洲に遊び、宗教哲學を研究して歸朝した。爾來我が宗教哲學の權威として永く東大に宗教學を講じてゐるが、氏が文人として世に知られた徑路を考へて見ると、まづその始は、明治二十八年に東大出身者や東大學生によつて創刊された雜誌「帝國文學」の同人であり、最初の編輯委員であつたことである。そして同誌に據つた人には高山樗牛、桑木嚴翼、大町桂月等があつたが、氏もまたこれ等の諸氏と共にこの搖籃から巢立つて、學者である一方、文人として世に立つたのであるが、歐洲より歸朝後「復活の曙光」を著し大いに名聲を馳せ、氏の莫逆の友たる高山樗牛と並び稱せられるに至つた。氏と樗牛とがいかに水魚の交りを有してゐたかは誰一人として知らぬものはあるまいが、氏が文人として

最も知られてゐたのは、明治の末、人としての樗牛を傳ふべく、樗牛の文章を集め、これに自ら少しく筆を加へて、「文は人なり」と題して公にした頃であつた。以後、氏の文人としての名は漸く薄らいで、たゞ我が學界の權威として落着くやうになり、又、新村出氏等と呼應して我が國切支丹宗門迫害史の宗教心理學的研究家として著名になつてゐる。現在東京帝國大學名譽教授である。氏の著には「復活の曙光」「花つみ日記」「停雲集」「現代佛と法身佛」「根本佛教」「宗教と教育」「切支丹宗門の迫害と潜伏」「切支丹禁制の終末」及び編者として「文は人なり」、翻譯としては有名なシヨペンハウエルの「意志と現識としての世界」等がある。

【語釋】

【肩を比べる】 等位を同じくする。

【南ドイツ】 バヴアリア、ウクルテンベルヒ、バーデン、ホーヘンツォルレン等の地方で、アルプスの北の高原である。森林が多く、その手入れもよく行届き、木材を主な産物とする。ドイツは林制及び森林教育がよく發達し、林業は世界の模範國で、林野總面積は全國土の三割に達し、北部には人工林多く、南部には自

然林が多い。樹種の主なものには松柏科の樹木、楠、櫻、樺、樺等で、年産額三億圓に達する。

【豪宕】 意氣さかんで小事にかゝはらぬこと。豪放。

【スウイス】 Switzerland スウイスはアルプス、ジュラ山脈と兩者の間の高原から成る。アルプスにはユングフラウ、ローザ、マツテルホルン等の名山が聳え、四時白雪を戴き、多くの氷河を懸けてゐる。マツテルホルン（四四八二メートル）はアルプスの最高峰ではないが、嶄然として空中に屹立する偉容はあらゆる友峰を凌いで、最も單一な「高さ」を感じしめる男性的な山であり、アルピニストの憧憬的になつてゐる。

【幽邃】 おくふかくて、靜かなこと。

【スコットランド】 Scotland. 大ブリテン島の北部。全域山地で、氷河によつて作られた湖沼及び峽灣多く風光明媚である。中世封建時代の史蹟にも富み、深山幽谷湖畔の風光は文學に取入れられて、スコットの湖上の美人、アイヴアンホーなどに現れてゐる。風俗も特有の發達をなし、ハイランダーと稱する親衛兵の服装は、その華美と典雅とで世界的に名高い。

【添飾する】 つけ加へてかざる。

〔蒼海碧空〕 あをうなばらとあをぞら。蒼は深青色、草のあをい色。轉じて廣く青色の意に用ひる。「碧」はあをみどり、青綠色。

〔錫蘭島〕 Ceylon I. インド半島の南方に位し、珊瑚礁及び二、三の小島によつて殆んどインドと連續する。中央部は高度大で、最高峰は二三三八メートルを示し熱帯にあるも高地は凌ぎ易く、高温多雨なる爲、植物よく繁茂し、椰子、ゴム、竹林、黒檀、肉桂、規那等は有名である。また茶、穀物、寶石、黒鉛等は主要物産である。

〔複合する〕 二種以上のものが合して一體となる。

〔懷郷の念〕 ふるさとをおもふ心。

〔故國〕 ふるいくに、久しく續いてゐる國、舊國。ふるさと。故山、故園。こゝは後者。

〔北ドイツ〕 オラスダからポーランドに續く平原、または臺地で、氷河作用で生じた湖沼、堆石が多い。北海沿岸にはオランダ海岸にあるやうな低地があり、バルチック海岸には砂丘が發達してゐる。

〔ロシヤ〕 全土殆ど一大平原をなし、地形は頗る單調で、高地としては東部にウラル山脈があり、西部にバ

ルダイ丘あるのみで、これ等の高地が諸川の水源地をなしてゐる。ロシヤは杉大な國土を有してゐるが、海に面すること甚だ少く、北は北極洋に面し、西北は僅かにフィンランド灣に面し、南は黒海に面するのみである。

〔平坦〕 土地が平らなこと。

〔廣漠〕 廣くてはてのないこと。

〔愛郷心〕 ふるさとを愛する心。

〔至當〕 至極適當。最も當然。

〔畸形〕 かたは。不具。

〔看過〕 見すごす。見たばかりですておくこと。

〔阿部仲磨〕 元正天皇の時の人、吉備眞備と共に唐に留學して姓名を朝衡と改め、唐の秘書監となつた。天平勝寶年中、遣唐使藤原清河に従ひ歸國の途に就いたが、安南に漂着し、遂に唐に留まり、光祿大夫兼御史中丞北海郡開國公に進み、寶龜元年（一四三〇年）七十七歳で彼の地に歿した。

〔三笠の山の歌〕 一首の歌は、「あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも。」である。「あまの原」の「あま」とは大空のこと。「原」は廣い所をさ

していふ語。「ふりさけ見れば」は見ようとす方方を遙かに望見すること。「ふり」は接頭語、「さけ」は放または離の義である。「春日なる三笠の山」とは、春日に在る三笠山の意。春日は大和國添上郡にある郷の名である。三笠山は春日神社の鎮座まします後方の山である。

〔かも〕の「か」は疑辭、「も」は歎辭である。極めて軽い歎辭である。さて歌意は、東の日本の方に今、月がさし上る所であるが、あの月は、以前わが故郷の奈良の京にゐた時、春日の三笠に出たことがあつた月であるがなあとといふ程である。

〔筑紫瀨〕 有明海ともいふ。島原半島、宇土半島が九州本土との間に擁する瀨。瀨岸概ね遠淺で、潮汐干満の差が甚だしい。八代海と共に不知火が現れる。

〔須磨の浦〕 神戸市須磨區の海濱をいふ。文字通り白砂青松で風光明媚、空氣も清淨であり、氣候も穏かで附近の舞子、明石と共に四季を通じて阪神人士の清遊地となつてゐる。夏季は海水浴場ともなり、名士の別荘が多い。また附近に須磨寺、一の谷等の史蹟がある。

〔高師の濱〕 高石の濱とも書く。大阪府泉北郡高石村海濱の總稱。「音に聞く高石の濱の仇浪はかけじや袖

のぬれもそすれ。」（一宮紀伊）

〔和歌の浦〕 今和歌山市の内、和歌山から南行約二里、南を受けた灣入海濱。東西凡そ二十町。東は名草山、金剛寶寺等が恰も蟹氣樓の如く翠微の中に聳え、東南は生石ヶ峯に連り、その麓の冷水浦、鹽津浦の諸港は常に船舶が輻輳してゐる。往昔、聖武天皇がこの地に行幸し給ひ、明光の浦と名を賜つたが、その後、若浦または和歌の浦に轉じたのだといふ。「和歌の浦に潮満ちくれば瀉をなみ蘆邊をさして田鶴なきわたる。」（山部赤人）

〔三世〕 佛語。過去、現在、未來。

〔歌枕〕 古歌に詠み入れた名所。

〔八犬傳〕 南總里見八犬傳の略。瀧澤馬琴の著。九輯、百六卷の一大讀本。里見義實は安房國に興つた豪族だが、その愛女の伏姫は、父の約を重んじて家犬八房に伴なはれて富山の奥に籠り、ひたすら菩提の道を勤めてゐるが、義實の功臣金碗八郎孝吉の子で、伏姫の許嫁であつた金碗大輔孝徳が、主君の恥を雪がうとして八房を銃撃し、一丸あやまつて姫に當り、姫は終に自殺した。その時、伏姫が幼時役の行者から感得した水

晶の珠數がちぎれて、仁、義、禮、智、忠、信、孝、梯の文字を現した八個の大王が八方に飛散り、姓に夫の字を冠した八人の豪傑（即ち八犬士——犬山道節、犬塚信乃、犬坂上毛、犬飼見八、犬川莊介、犬江親兵衛、犬村大角、犬田汶吾）が世に出て、各種々の境遇を経た後に、終に相合して里見氏に仕へ、輔佐の功を立てた物語である。

「——の名所巡り」 八犬傳に現れる名所を尋ねて遊覽することであらう。

「ハイネ」 Heinrich Heine. ドイツの有名な詩人、文筆家。ユダヤ人の家庭に生れ、初め商業に従事、叔父の援助でボン、ベルリン等の大學に法律を學び、在學中既に詩人として知られ、英伊等にも遊んだ。後、専らパリに住み、遂にその地に没した。初め浪漫派に屬したが、次第に社會主義的傾向を帯び「青年ドイツ」の運動に關係し、また辛辣な諷刺の筆を振つてジャーナリストとしても活躍した。その詩は繊細な技巧と民話的素朴、感傷性を有して今なほ廣く愛誦され、ゲーテに繼ぐ最大抒情詩人と稱される。「歌の本」「新詩集」等の抒情詩集の外に、「ハルツ紀行」以下の旅行記があ

るが、就中諷刺詩「アッタ・トゥロル」は、バイロン以來の鋭敏な獨創的詩として、現代文學に多くの貢獻を廣してゐる。（西紀一七九九—一八五六年）

「——の詩が云々」 ドイツ人はライン河を愛し、ライン河に憧憬した。彼等は常に「父ライン！ 父ライン！」と口吟んでゐる。けれども、ドイツ人以上にライン河を熱愛してゐる國民がある。それはフランス人である。これが爲にドイツ、フランスの兩國は西紀九世紀頃の後半から猛烈に争つてゐる。ナポレオンは、一八〇六年プロシヤとロシアの兩國と戰つて、これを破り、チルジツト條約を結んだが、この時ライン及びエルベ兩河間の地は佛國の有となつた。ナポレオンがワーテルローに敗退して後、一八一五年ウィーンに列國會議が開かれたが、この時プロシヤはライン河中流西岸の地を取得したに止まつた。そこで國民のラインに對する憧れは一層熾烈に燃えたのである。ハイネは正にこの時代に生きて、ラインの讚美を詩に託して歌つた。國民はその詩を愛誦して、益々ラインを懷ふ情を高調させた。だから、政治上の國境はさておき、國民の感情の上では、ラインは疾にドイツのものになつて

るたわけである。ハイネの有名なローレライの歌を次に掲げる。

おのが心のいかなれば
かくは悲しくなりぬらむ
たゞそのかみの物語り
湧きこそ出づれおのが胸

風冷やかに暮れそめて
ゆうべ靜けしライン川
沈みゆく日の影うけて
かがやきわたる山の峯

みめ美しきたをやめの
姿ぞ見ゆる山のうへ
黄金のかざりひらめかし
とくや黄金のみだれ髪

黄金の小櫛手にとりて
ときつつ歌ふ聲すなり
おどろくばかり力ある

しらべをたかく響かして

小舟こぎゆく舟人は
怕れそめたりその歌に
かくれし礁見もやらで
ただうち仰ぐ山の上

小舟の影も人かけも
たちまち沈む浪の底
あやしき奇しき調もて
かくなしつるよローレライ

——尾上柴舟譯——

「スコット」 Sir Walter Scott イギリスの詩人、小説家。スコットランドの人。法官となりナイトに列せられた。列め「湖上の美人」その他の詩集によつて名聲を博したが、バイロンの出づるに及び小説に轉じ、「ウエーヴアリー」「アイヴァンホー」等多數の小説を著して浪漫主義の頂點に立つた。（西紀一七七一—一八三二年）

「湖畔詩人」 The Lake Poets 第十九世紀の中葉に於

ける英國浪漫派詩人の一派。グラスミア(Grasmere)及びライダール(Lake)兩湖を中心とする湖沼地方に住み自然と人生とに關する冥想的、超歴史的、超國家的の詩を賦したウォーズワース、サウジ、コールリッジ等を指していふ。

「山川を國民の心の中に云々」スコットや湖畔詩人の豊かな詩藻によつて、イギリスの美しい山川は、鮮かに描出され、その國民の頭に深く印象づけられるに至つたのである。

「新文明の爲に云々」十九世紀以來の科學文明の發達によつて、人々は昔の人の經驗しなかつた便利や享樂を受けるに至つた。しかし、その反面には、科學文明の恩澤を隨喜する餘り、それをのさばらして、古來の名勝や風致が破壊される結果を招いた。やたらに山にケーブルカーを架けたり、自動車道路を設けたりして、それが爲に舊時の面影を止めないやうになることは、遺憾千萬である。

「性情」こころ。性質。

「湖上の美人」Lady of the Lake 全六篇。「湖上の美人」たる失意の貴族の娘エレンを中心にして、變装し

幻の仙境を偲ばせた。

なほも進むと、野鴨の雛さへもその水面で泳ぎかねる位な、奥深く靜かな入江が林の中に、ちらりと見え初めた。しかしまだ樹立に遮られて、しばしの間姿を隠してゐるが、再び現れて來た時は一層廣くなつて、高い岩や、草木の茂つた小丘の姿をその紺碧の鏡の面に寫して來た。そして狩人が更に先へとさ迷うて行くうちに、その水面は更に廣くなつた。蓬々と木の生えた小丘はここではもはや終つた森の中から聳え立つてゐるのでなくて、濠で圍まれた城のやうに、波に取巻かれて漂つてゐるやうに見えた。しかも小丘とその親の丘の間に靜かに廣がつてゐる湖水は一層廣く、果てはその各は遠く退いて湖上の島となつた。

今や谷間から出ようとするには、注意深く巧みに足場を求めて、遠く彼方に突き出た絶壁を攀ぢ登らねば彷徨ふ人の眼には進み行く道も見當らなかつた。エニシダの強い根を梯子とし榛の嫩枝を頼つて、高い所に登ると、足下には磨いた輝く純金を延べたやうに、カトリン湖は、夕日を浴びて燦きながら、岬、絶壁、入江や、燦然と紫色に染められて、輝く光の中に漂つて

た王、酋長及び彼女の戀人の間に起る戀愛葛藤。狩場戰場等の壯烈な場景がカトリン(Katherine)湖を背景に美しく展開されてゐる。この詩によつてカトリン湖は文藝巡禮者の聖地となつた。次に全篇中でも有名なカトリン湖の風景を抄録して置く。

恵み豊かな自然は、山の兒なる花や木を、自由に氣儘に撒き散らしてゐた。そこでは、野薔薇は吹く風に咲き匂ひ、山楂や、榛はかしくに打交つて、青白い櫻草と堇の花は、崖毎にここと咲き亂れ、罰と誇の表象なるチキタリスと龍葵は相並んで、雨風に蝕まれた岩によく見受けるやうなあらゆる汚點のある暗い色を塊めてゐた。風の吹く毎に枝の揺らぐ灰色の白樺と白楊がその下に嘆き、高い所には秦皮と、逞しい樺が、高く聳えてゐる岩に深く根を下し、なほその上には多くの松の木が裂かれた幹を垂れて、崖が空高く顔をつき合せてゐる所に、その枝を狭い空に投げてゐた。いと高き所には、白い峯の輝き、薔薇、常春藤、葛の長く垂れ下つた枝が、揺らぎつ踊りつする所、彷徨ふ人の眼には、殆ど快い夏の青空を見ることが出来ない程、かくも不思議な幻想的な太古のまゝの境は夢

ある島々や、また魔の國の見張をする巨人のやうに聳えてゐる山々と共に、湖の全景を現して、遠く蜿蜒として廣がつてゐた。南の空には巨きなベン・ヴァニウ山が、岩、圓山、小丘等太古の地球の斷片を、一塊にして湖水の上に雜然とその影を投げてゐる。途を迷はず森はベン・ヴァニウ山の壊れた山腹や、蒼白い頂を羽毛のやうに飾つてゐた。一方、北の方には、ベン・アン山が高く中空に裸の額を高く聳やかしてゐた。(橋谷正雄譯)

「マルム」Johann Christoph Friedrich von Schiller. ドイツの詩人、劇作家。ゲーテと共にドイツの二大文豪と稱せられる。初め法律、醫學等を學んだが、處女作「群盜」を發表して成功を収め、後、ライプチヒ、ドレスデン、その後ワイマールに移つてゲーテと親交を結び、またイエナの大學の歴史教授となり、歴史、美學及びカント哲學の研究に従つた。後、ワイマールで劇作に専念し、終に同地に歿した。ドン・カルロス「マリア・スチュアート」「オルレアンの少女」「メツシナの花嫁」「ウィルヘルム・テル」等の外、藝術に關する論文及び三十年戰役、ネーデルラントの歴史を書いた。

その他多くの諷刺詩、諷刺詩を始め著名な觀念詩がある。ゲーテによれば、彼の作品を一貫するものは自由の精神である。

「ウイヘルム・テル」 Wilhelm Tell. 傳説上のスウイスの義民。一八〇四年ドイツのシルレルがその傳説を材として名曲「ウイヘルム・テル」を作つた。これに據れば、スウイスの四森州湖を圍む諸地方の住地はオーストリア皇帝の代官ゲスレル(Gessler)の暴政に惱み、自由を獲るために戦ふべく、一夜高原に會して盟約する。剛勇任侠の獵師ウイヘルム・テルは代官の迫害と闘ひながら、遂に己が矢先にかけて斃したので、スウイス人は勝ち、暴政から解放される。テルが通行人に敬禮さすべく竿高く掲げてある帽子に敬禮しなかつたので、代官が怒つてその面前でテルの兒の頭上に林檎を置き、これを射落せば助命すべしと約したその林檎を見事に射落す場面は、殊に名高い。

「氣象、民風」 「氣象」は、ろだて、きしつ。「民風」は人民のならはし。

「四森州湖」 "Lake of the Four Forest Cantons" の譯語。ルツェルン湖(Lake of Lucerne)の別稱。スウ

イスの中部に位し、形状極めて細長く屈曲し、中心部がシユワイツ、ウリ、ウンテルワルデン及びルツェルン各地方によつて峽窄せられてゐる爲、延長三十九キロに及ぶも、幅は一キロ乃至三キロに過ぎず、湖面は海拔四三三メートルに達し、ジュルソアの南の最深點は二一四メートルであるが、ルツェルン附近は、一〇〇メートル以内に過ぎない。湖の南東部をウイ湖と呼び、山岳四周し、風景が極めてよいが、なほ中部の北に屹立するリギ山の眺望が最も壯觀である。湖畔にはルツェルン、キユスナハト、ブルンネン、フリューエン等の都邑がある。

「ハイネの詩を云々」 前出の「ハイネの詩が云々」の項参照。

「洞庭」 支那湖南省の北部にある大湖。夏季には増水により長さ約一二〇キロ、幅九六キロに達するが、冬季は減水して各部に溝渠を残すのみとなる。水源は湘、資、沅、澧の四大江の流入により、吐出口は岳州の側にあつて楊子江に通じてゐる。湖上は減水季を除くの外、汽船を通じ、交通上に便利を與へることが大である。湖岸は風景優れ、古來種々の遺跡に富む。

過洞庭 呂洞賓

朝遊北海暮蒼梧。

袖裏青蛇膽氣粗。

三入岳陽人不識。

朗吟飛過洞庭湖。

「赤壁」 支那黃州の北西、楊子江岸にある赤鼻山（または赤壁山）と稱する小山。蘇東坡の「赤壁の賦」によつて名高く、世にこれを東坡の赤壁と稱する。

「南支長江」 南部支那。楊子江。

「招致する」 まねいて來らせる。まねき寄せる。

「ゲート」 Johann Wolfgang von Goethe. ドイツ最大の詩人、フランクフルト・アム・マインに生れ、ライプチヒ及びストラスブルヒで學び、特にヘルデルの影響を受けた、この頃「ゲッツ」及び「ウエルテル」を著して、所謂スツルム・ウント・ドラング運動の尖端に立ち一七七五年ワイマル公國を尋ねてこの地に居を定め、後その首相となつた、この頃から彼はスツルム・ウント・ドラング時代の傾向を離れて、古代藝術の調和美を理想とし、「イフィゲーニエ」「タツソー」等の古典的戯曲を作つた。それ以後發表した作品に、小説「ウ

イルヘルム・マイステル「親和力」、叙事詩「ヘルマンとドロテア」、詩集「東西詩篇」、自叙傳「我生活より眞事虚事」、イタリー旅行に基く「イタリー紀行」、及び近代世界文學に君臨する作品「ファウスト」等がある。彼はまたシルレルと交り、相協力してドイツ文運の隆興に寄與する所極めて大であつた。詩人としてその豊富かつ自由な表現と深遠な理想とを兼ね備へた。

(西紀一七四九—一八三二年)

「その國を知るや」 ゲーテがイタリーを詠じた「君よ知るや南の國」の歌の邦譯は數種あるが、獨唱用のものは歌ひ易いやうに變へてある。原歌の意味を知るには直譯體がよいから、次に森鷗外の翻譯を掲げる。

ニミヨンの歌

「レモン」の木は花さきくらき林の中に
こがね色したる柑子は枝もたわみにのみ
晴れて青き空よりしづやかに風吹き
「ミルテ」の木は靜に「テウレル」の木は高く
くもにそびえて立てる國をしるやかなたへ
君と共に行かまし

高きはしらの上にやすくすわれれる屋根は、
そらたかくそばだちひろき間もせまき間も
皆ひかりかがやきて人がたしたる石は
ゑみつつ己れを見てあないとほしき子よと
なくさむるなつかしき家をしるやかなたへ
君と共にいかまし

立ちわたる霧のうちに驢馬は道をたづねて
いななきつつまよひひろきほらの中には
もも年経たる龍の所えがほにすまひ
岩より岩をつたひしら波のゆきかへる
かのなつかしき山の道をしるやかなたへ
君と共にいかまし

【柑子】 蜜柑である。また蜜柑の一種柑子蜜柑をいふ。イタリアは氣候が温暖で、殊に南部は亞熱帶的氣候を呈する。随つて柑橋類の生長に適し、これが栽培が盛んである。

【オリーブ】 olive オリーブ、ホルトの木ともいふ。歐洲原産のもくせい科の常緑小喬木。葉は革質、狭披針形。葉腋から總狀花序を出し、細小な淡緑白色の芳香

また歴史的の事件も、みな同様な働きを持つてゐる。それ故、國土の美しさは、多くのそれ等の中の一つに過ぎないのであるが、たゞ、それが時を選ばず、また何人にも同等に不知不識のうちに、作用するものであるところに、特殊性を持つ。作者も「北ドイツやロシアのやうな平坦廣漠の土地でさへ、その住民の愛郷心は、その土地の天然を離れない」といつてゐるが、同じく國土を愛するならば、無味乾燥な土地を、單に馴染であるといふ一點からばかり愛するのよりも、馴染である上に、その土地が秀麗である爲に愛せずにはられぬといふ方がどれ程幸福であるか分らない。同時にその愛國心は二重に強固であるわけである。作者は後半に於て、美しい國土を取扱つた文學が、いかに有効に愛國心の向上に役立つかを論じてゐる。つまり、もと／＼本能的に抱懐しつゝある愛國心が、さういふ文學の刺戟を受けて、更に強く美しくはぐくまれるといふのである。これは疑ふべくもない事實で、直接見聞しない部分の我が國土の美を文學作品によつて教へられて愛着を抱き、或は自らは意識しなかつた美を教へられて、更に愛着を深める、そしてその結果、結局國土愛の増大となり、愛國心の向上となる過程

ある花を開く。果實は廣楕圓形の核果、暗綠色、または帶褐色。果肉から「オリーブ油」を採る。このオリーブは、やはり南部イタリアに栽培が盛んである。否イタリア獨得の農産物であつて、その栽培は世界第一である。世界の需要するオリーブ油はイタリアとスペインとがその大部分を提供してゐるのである。

【石柱の家が云々】 イタリアは到る所から美石を産するだけにまた到る所に美しい石の建築が昔のまゝに残り、または柱と土臺だけの廢墟となつて遺つてゐる美しい石柱の家が、青空や青い海の間に點々としてゐるイタリアの風景は、遊子の心をそらずには措かない。

賞批評 愛國心はこれを内面から見れば、本能的な血族愛の擴大されたものである。随つて、本質からいへば氷の家に住むエスキモー人種にも、四六時中裸で暮す南洋の土人にもあり得るものである。しかし、その愛國心を外面から強く固め、より大きく育てるものは、即ち本課に説かれてゐるやうに、國土の美しさなのである。もとより外面からこのやうに作用するものは、ひとり國土の美しさのみには限らない。國民教育も、政治事情も、

は、あらゆる人の經驗中に見出されるであらう。かういふ事實を考へると、「祖先以來の文學にも歌はれてゐる山水が、新文明のために破壊されて、全く舊時の面影を止めないといふやうになれば、それは國民文學の大損害で、また愛國心の一部分を毀損する事になるのは、甚だ寒心すべき現象であるといはねばなるまい。また、この文學と國土と愛國心との關係は、一面に於て文學の價値そのものの重要さを教へてゐるものである。優れた文學作品が、一個人の生活に、或は一國の社會情勢に、大きな影響を與へることも屢々あるが、また本文に記されてゐるやうに、景觀の美を綴つた詩文が讀者をして恍惚たらしめ、遂には文字だけを通して空想裡に遊ぶのに堪へず、直接出掛けて行つてその美觀を滿喫したくもさせるのである。まことに唐代諸詩人の美辭麗句が絶無であつたら、今日支那に赴いて、自ら南船北馬して景勝を求めめる遊子の數も、その半ばを減することであらう。ゲーテがその傑作「ウイヘルム・テル」中で、美少女ミニョンをして「君よ知るやレモン咲く國、オレンジは綠濃き葉に照り映ゆる……」と歌はしめなかつたら、イタリアへの旅人の幾何かを減じたであらう。筆者はここで「一

國の天然がいかに驚くべき引力を持つてゐるかを證するものである。と結んでゐるが、前にいつたやうに、これは同時に、「文學がいかに驚くべき引力を持つてゐるかを證する」ものでもあるわけである。

参考

作者の文章に就いて一言しておく。

氏はさすがに樗牛と肝膽相照した人だけに、實に文章の達人である。そして、氏の文章は樗牛の文章ほど高調な詩風なところは無いが、餘程似通つたところのあるもので、美文によし、感想文によし、隨筆によし、評論文によし、議論文によしといつたやうに、種々な文章に適應して居り、いはゆる天才的な閃をもつた文章ではないが、樗牛の文章より用語が練れてゐて無理のないだけ無難だともいへる文章である。だが、その美文、殊にその感傷的な文章に至つては、樗牛のそれと實によく似てゐるものである。例へば、「爐の香をつぎ足さん。されどこの香いつまでつゞくべしや。歳は逝き、歳は來り、我は春毎に老いゆきて思慕悵恨の事のみ、歳と共に多きぞかなしくもうれしき。思ひきや、われかの友の後に生き残りて、濤聲のかたに、かれが墓邊を思ひやり、こゝ清見瀉にひとりかれが遺文を誦しつゝ、この夜ここに歳

を送らんとは。幾とせか相隔たりての後の再會に、この友と相擁して、喜びに泣かんと期せしこの年、われ五天のあなたより歸り來ぬれば、友は已にあだし世の人なり埠頭に手を握りて語らんといひしかの友はまこと語なく、幽明界を異にして、その手また握るべくもあらず。友よ、われ今ここにあり、龍華寺畔、夜半の風寒からん。寒水石の墓碑に憑りて夢の如き山水に恍惚の樂しみを今宵はすて、ここに來よ。」といふやうなもので、樗牛の「清見寺の鐘聲」の文などと比べるならば、いかによく似通つた文章であるかに驚かされるであらう。まことに氏の筆は、纏綿たる情緒を表すにもふさはしいものである。なほこの外、氏の文章のうち、最も熱のある力強い生氣の満ちてゐる文章はやはり「復活の曙光」の文章である。故に、氏の文章の代表的文章を知らうとするには、この「復活の曙光」を讀むに如くはないと思ふ。

附録

上古及び奈良平安時代の文學

扱方

第一學年から第五學年に至るまで、上は古事記、源氏物語から下は明治大正昭和の各時代に至るまで兎も角もその代表的作者の作物の一斑を讀み味はつて來た。本巻及び卷十の附録はこれ等既得の國文學の作品を系統づけ、更にその展開の迹を辿らしめ、その思潮の流れを明瞭ならしめたいと、上古から現代に至るまでの國文學史の大體を述べたのである。既得の各文學作品の相互關係を知り、その知識を確實ならしめ、苟くも中等學校卒業生として、當然な常識であらう我が國文學の概括的な體系を知らしめたいのである。本附録は文學史潮の收得が主意であるから、文學史的區分を先づ十分に理解せしめ、その間に發生し、發達した文學に就いて、既得の知識を整理せしめつゝ、未知の文學に就いて説明し、これを體系づけるやうにされたい。——それに就いて、本文學史は、單に中等學校卒業生の常識、廣く日本國民としての一般常識とさせるものであるから、最も常識的に概

括的に、説明されて、餘り新しい意見、學說などは教へられぬやうにされたいと思ふ。——又、文學史的區分であるが、これは決して歴史的區分、政治的區分とびつたり一致するものではないから、出来るだけ歴史的區分を土臺として説いて來た、これに對して異論を生ずる事と思ふが、文學史と、その時代の歴史とを相關聯させて説明することは、印象的であり、生徒の理解にも便利だと思ふから、可成このまゝで説明されたい。要するに、本文學史は文學史そのもの、教授といふよりは、生徒の既得の國文學的知識を整理し、體系づけ、我が國文學の一貫した風潮、特質を知らしめるのであるから、あくまでさうした用意の下に教授されることを望む。徒らに新説異論を樹て、或は煩雜な説明をして、生徒の頭を混亂せしめないやうに注意されたい。尙かうした取扱方は以下の總てに亘るから、以下の文學史に對しては扱方の詞を省略する。尙語釋は固有名詞の解釋に止め、文章の上には原則として言及しないことにする。

教授

語釋

「上古時代」 奈良朝以前をいふ。國初より第三十二代

崇峻帝崩御まで一千二百五十一年間の稱。文化の搖籃時代で、國民性は純朴で敬神崇祖の風があり、政治の中心たる都府も帝位繼承と共に遷都されて、簡素な生活をしてゐた。思想も幼稚であり、文學も形式が整はなかつた。

〔奈良朝時代〕 第三十三代推古帝より第五十代桓武帝の平安奠都まで約二百年間の稱。中にも第四十三代元明帝和銅三年(一三七〇年)三月都を藤原から奈良の平城京に遷されて以後七代七十七年間の固定した生活諸制度により、文化的活動を發揮し、我が國文化が外來思想の影響をうけて融化發展し始めた時代で、平安朝時代をつなぐ前代として新文明建設の過渡期。普通に上古時代を含ませた上代文學として散文よりも韻文に作品的價値を有するので、歌謡時代ともいふ。文學史的區分は持統、文武帝の頃(藤原時代)は雄渾秀麗な歌風を生じた和歌黄金時代(約二十年間)、光明、淳仁帝の頃(天平時代)は和歌が緊張から弛緩し、雄渾から優柔に移らうとした時代(約五十年間)、稱徳、光仁帝の頃(奈良末期)は漢文學の隆昌につれて和歌衰頹時代(約二十年間)。

〔歌謡の萌芽云々〕

人間には内部に感じた情緒を外部に表現せずには居られない本能性があるが、それが文學の主要素生命であるのは勿論である。で、文學發生の段階についてマッケンジーは「原始的な藝術の中心様式である舞踊合唱歌には劇的要素も、抒情的な要素も、物語の要素もすべて現れてゐるが、心理學的に見れば物語の要素(叙事詩)は最も遅れて發生し、最も單純な意味の劇は何かの意味を含ませた身體運動を指してゐるに過ぎないもので、又、抒情詩も舞踊のリズムから生れて來た不明瞭な律語に過ぎなかつた。劇や抒情詩の要素は單なる感情を表現するに過ぎないものであるが、叙事詩は或程度の反省作用が入つて感情を先導して行く。」(文學の進化の大意)といつて叙事詩より以前に抒情詩更に舞踊へとその發生を説いてゐる。で、文學の形式は詩と散文とに大別され、詩には抒情詩、叙事詩、劇詩、の三大部門に別れ、散文は律語を以てしない所の文學的表現の總稱で抒情文、小説、記事文、評論文等多種多様である。

〔記紀の歌〕 上古の歌謡は古事記、日本書紀によつて傳へられる百八十首ばかりと、風土記のもの萬葉集中

作者不明とある百餘首とを數へ得る。で、諸冊二尊唱和を最古とするが「あなにやし、えをとこを。あなにやし、えをとめを」の如きは五言二句であり、あな、を、は感動詞で用語の半を占めてゐる。この五言が基調となつて五五となり、五五、五等と連續して行き、譬喩と枕詞と疊句(疊語)の三種を用ひた驚くべき修辭的技巧を示して行つた。歌謡の種類には戰爭、酒、戀愛、哀傷、宗教的、歌垣、巷(諷刺的俚歌童謡)、問答等があり、作者は多く天皇、皇后、皇子、朝臣等。歌態には片歌、混本歌、短歌、長歌、旋頭歌の六つがあつた。

〔萬葉集〕 萬葉和歌集。二十卷。撰者未詳で橋諸兄説(眞淵)、大伴家持説(契沖)とあるが、後者とする方が行はれてゐる。作年代は大化革新以降孝謙天皇の末までの約百年間に出來、仁徳天皇の頃から淳仁天皇の天平寶字三年(一四一九年)正月一日まで約四百四十六年間の歌を集め、長歌二百六十二首、短歌四千七百七十三首、旋頭歌六十一首、合計四千四百九十六首の數に上る。それを四部門、即ち雜歌、相聞、挽歌、四季歌に分れ、又、正述(心緒、寄物陳、思、譬喩、問答、羈旅、悲別、東歌、戲笑歌、詠種物歌等の種別にもなつて居り、

代表的な作者には(大汝、少彦名、日女命の神名も見えるが)皇族では聖武、淳仁、舒明、天智、文武、文武、仁徳、雄略の諸天皇と孝謙、皇極、元正、元明の諸女帝をはじめ皇后、太子、皇子、皇女、内親王、王、女王であり、臣下では朝臣、真人、宿禰、連、君、首、臣、造、村主、使主、史、直、倉人、僧侶の身分官と遊行女婦、乞食者(ほ、びと)の下賤者、或は防人として出征する無名武人の類に至るまで其數六百三十一名諸階級全般に通じてゐる。柿本人麿、山邊赤人、山上憶良、大伴家持、同旅人、笠金村、額田王、譽田女王、石川郎女、大伴阪上郎女等は有名歌人である。この集が後世に及した影響としては後世の敍撰集が二十卷を標準としたこと、歌の分類に對する典型を與へ、藝術品として即興的なものを廢し、題詠の例を示し、耳の歌とさせ、歌人といふ純文學者を輩出せしめたこと等。又、思想的に見れば支那思想、佛教思想の色が強いが日本固有の思想が中心であり、唐詩輸入に刺戟されて集めたといふことも注意される。

〔短歌〕 五七の音律が基調で五、七、五(上句)、七、七(下句)の三十一音の詩形、記紀中にも見え、萬葉集

に最も多く、四千百七十三首載せられてゐる。集中反歌として長歌の終に載せられてもゐる。古今集以後和歌といへばこの短歌を意味するやうになつて、今日の隆盛を見た。長歌に對する短歌である。

〔長歌〕 五七、五七、を二回以上並べて最後を五七七でとめは歌態で、萬葉集に一番多く二百六十二首あつて、優れた作が多い。長歌は古今集中にもあるが、内容格調萬葉集に劣る。

〔旋頭歌〕 五七七といつては又五七七と頭をめぐらす歌の意で、記紀に問答歌として二三あるが、萬葉には六十一首ある。が、趣味に適せぬためか、後絶えて古今集に少しあるのみ。

鳥總立て、船木伐るといふ、能登の鳥山、けふ見れば、木立繁しも、幾代神びぞ(卷十八、大伴家持)

〔祝詞〕 宣長はノリトキゴトの約といふ。天皇の命令によつて神前に告白する祭文で、漢字で書かれた純國文體で、奈良朝以前の散文として代表的のもの、形式は散文ではあるが韻文であり民族的叙事詩といへる。で、神の御名を呼びかけて祈願の旨を述べるけれどもその主要な意義は聽衆と共に「ことほぐ」ことで、國

家安穩、民族幸福を欣求するのが主眼で、従つて壽詞賀詞の意味も含まれて来る。これは祭政一致の思想、汎神論的信仰、言葉の信仰、従前の祭禮の様式化、運命觀罪穢觀の發達、神ながらの道と崇祖の俗等が原因して發達したもので、一貫した思想は現實的な意志の表明である。現存の種類には「延喜式」にある二十七篇、他に「台記」にある中臣壽詞、「神代紀」の燧火壽詞、「顯宗紀」の新室壽詞とがある。修辭方面から見れば形容の莊麗、疊語、美稱、對句があげられる。出雲國造壽詞、大祓詞、大殿祭、祈年祭、御門祭等は名篇。

〔宣命〕 漢文體の詔敕に對して、漢字で書かれた純國文體で、祝詞が神に告白するに對し、天皇が臣下に下すもの、みこと(命)をのる(宜る)の熟語の吳音讀みであらう。祝詞と共に奈良朝以前の散文の代表的のもので、古代の原始的朝廷の素朴な姿をそのまゝ、表現して居り、君臣の親子の如きが知れる。祝詞があつての想形一定してゐるに反して、宿命は形式事件の變化と共に定まつてゐないが、優麗簡古さがあるといつてゐる。語格は漢字の正訓を用ひて助字を割書してゐる、これを宣命書といふ。現存の種類には六十二篇あつて、即位

立后、立坊、改元、五節、出金、追賜、恩撫、弔賻、遺唐、外交等。

〔漢學の傳來〕 三韓との交通により早くから傳はつてゐたらしいが正史によると、第十五代應神天皇十五年(九四四年)八月百濟昭古王阿直岐を遣して馬を献じたが、太子菟道稚郎子之を師として經典を學ぶ、翌年二月壬仁論語十卷、千字文一卷を献じて以後漢學大いに起つた。

〔佛教の渡來〕 三韓交通により早くから傳へられたらしいが、第二十六代繼體帝十六年(一八二年)司馬達等大和に佛像を安置し禮拜した、信する者なかつた。第二十九代欽明帝十三年(一一二二年)十月百濟明王、金銅釋迦佛像一軀と經論、幡蓋等を献じたのを、佛教公然渡來の始とする。

〔修史の事業〕 歴史修纂事業をいふ。第十七代履中帝四年(一〇六三年)八月始めて史官を諸國に置いて記録せしめ、更に第三十三代推古帝二十八年(一一八〇年)に天皇紀、國紀、臣連伴造同造百八十部並に公民等本紀を撰び、更に第四十代天武帝十年(一三四二年)三月には帝紀及び上古の諸事を記せしめた大事業等があつ

たが完成せず、第四十三代元明帝に至つて遂に古事記選述となつた。

〔古事記〕 三卷。元明帝和銅五年(一三七二年)正月二十八日、太安萬侶が勅をうけて選んだ我國の古記録。我が國の開闢より推古天皇の御代に至る歴代の事蹟を編年體に記したもので、勅撰國史の權輿であり、文字記録のない國史的事實に語部によつて傳誦されてゐた點から見てもこの修史事業は意義が深い。在來一切の史傳を天武天皇が削偽定實せられて稗田阿禮に誦習せられた事實を安萬侶が文章化したもので、文體は國文脈を主として漢文を混へ、漢字を音表文字として國語をうつした體が多く、假名の發達しない時代なので記述に苦心した點がある。内容は支那修史の影響を受けた國史でもあり、神道書でもあるが、古代の原始生活をそのまゝ傳へた生々發育主義的な生の歡喜の記録である。文學的には神話傳説集で、特に神代卷(卷一)には詩興が盛られ、藝術味豊かで、散文とはいへ音律を具へた民族的叙事詩である。

〔語部〕 朝廷に奉仕して上古の事蹟を語り傳へる部族で、我が國上古無文の世はこの語部が専ら口語によつ

て語り継ぎいひ傳へた。天語、部連、語臣、語造、語君等があり、語るものを神語とも天語ともいふ。

〔稗田阿禮〕 傳未詳。天鈿女命の裔で猿女君の一族。天武帝に仕へ強記絶倫であつたので、帝はみづから國史を口授せさせられた。文武帝に仕へ舍人となり、元明帝和銅四年から五年にかけて彼の記憶した國史を太安萬侶に語り、それを整理記録したものが古事記であるが、時に彼は二十八歳であつた。生國は大和國添上郡平和村稗田であるとも、又は男であるとも巫女であるともいはれてゐる。

〔太安萬侶〕 氏の長者で元明帝和銅四年に正五位上となり、養老七年(一三三三年)從四位下で死んだ。當代文章家中最も名ある一人で、古事記を撰述し、日本書紀の編纂にもあづかり、我が國修史上の一大功勞者である。

〔日本書紀〕 三十卷。古事記撰述後八年、即元正帝養老四年(一三八〇年)に勅命によつて舍人親王が總裁となり、太安萬侶、紀清人等が撰述した國史の始で神代から持統天皇までの國史。歌謡以外は華麗な漢文で書かれてある。内容の豊富、體裁の整齊、衆説を網羅した

のなど、古事記の及ぶ所でない。が、餘り精細すぎ、文飾に妨げられて、傳説、史實の眞を失つてゐる點がある。

〔風土記〕 元明帝和銅六年(一三七三年)五月諸國に令して、諸國郡郷名はなるべく美名をつけ、且その地方の天産、農産、草木禽獸、魚蟲、土地の肥瘠、山川原野の名稱のいはれ、古老の言傳へ等をも併記して奉れとの命により献進したものが風土記で、當時のは常陸、出雲、豊後、肥前、播磨の五つのみ、以後のものとは區別してこれ等を古風土記といふ。上代散文の佛を見るに好い資料。文體は漢文體のも、國文體のもある。

〔懷風藻〕 一卷。孝謙天平勝寶三年(一四二一年)十一月淡海三船の撰。最初の漢詩集。天智帝から當代まで約百年間、弘文帝、大津皇子、葛城王を初め藤原宇合等六十四人の詩百二十四篇を略年代順に收む。文學的價値は支那六朝唐詩の模倣で大したものではないが、題材、思想が後世歌界に及した影響は甚大で、以來平安朝初期にかけて漢詩文隆盛時代の素地を作つた。弘文帝、大津皇子に佳作がある。
皇明光日月。帝德載天地。

三歳并泰昌。萬國表臣儀。(弘文帝)

金鳥臨西舍。鼓聲催短命。

泉路無賓王。此夕離家向(大津皇子)

〔平安朝〕 第五十代桓武帝延暦十三年(一四五四年)十月都を奈良から平安京(京都)に遷されて以後第八十二代後鳥羽帝建久元年(一八五〇年)に源賴朝が鎌倉幕府を開いたまで約四百年間の稱。王朝、藤原、貴族文學時代。當代に入り唐制模倣は諸制度に完備された。大體の文學史的區分は平安初期は嵯峨帝弘仁前後の漢詩文極盛時代と宇多帝寬平前後の和歌復興時代(百二十年間)とであり、中期は醍醐帝延喜から村上天曆兩時代にわたる和歌隆昌時代(八十五年間)と一條帝寬弘から後冷泉帝康平兩時代にわたる散文全盛時代、(八十五年間)であり、末期は白河帝承保から後鳥羽帝壽永元曆(鎌倉時代につづく)にわたる和歌革新時代(百年間)。

〔古今集〕 古今和歌集二十卷。醍醐帝延喜五年(一五六五年)四月十八日紀貫之、凡河内躬恆、紀友則、壬生忠岑の四人勅をうけて萬葉に入らぬ古今の歌、又自らのをも撰んだ勅撰和歌集の最初。歌態を春、夏、秋、

上古及び奈良平安の文學

冬、賀、離別、羈旅、物名、戀、雜、哀傷、雜體(長歌、旋頭歌、俳諧歌)大歌所歌とに分類し、墨消しの十一首を加へ一千一百十首あり、淳仁帝から當代まで約百四五十十年間の歌を收む。歌風は萬葉の雄勁から優柔に、五七調から七五調に、單純素朴の思想から複雑、思索的になり、情を物に托して比喩とする風が盛んとなり、佛教により消極的無常觀を詠じ、當代の人情風俗をそのまゝ寫して、婉美纖弱な情趣を表してゐる。後世歌集の範を垂れたもの。「古今ふり」といふ。

〔醍醐天皇〕 第六十代醍醐天皇。御諱は敦仁。延喜の帝とも申す。宇多帝第一の皇子で、延喜八年(一五九〇年)九月二十二日崩御、御齡四十六。天資聰明にして銳意民福を念とせられ、寒夜御脫衣の美譚もあり、時人延喜の聖話と稱した。文藝に親しまれ延喜五年(一五六五年)四月十八日貫之等に撰ばしめたもの古今和歌集二十卷がある。又、修史として三代實錄、延喜格、延喜式を撰ばしめた。故に歌人、文人、詩人、畫工、學者、故實家等輩出した。御製は後撰集(四)、拾遺集(二)、新古今集(九)等に入つてゐる。

〔紀貫之〕 望行の子。延喜年中御書所預となり、天慶

中玄番頭となり従五位下に進み、木工權頭に遷り従四位に陞る。九年(一六〇六年)歿、年六十五。和歌、國文を以て稱せられ萬葉の柿本人麿に比される。文學史上の功績は土佐日記その他の文によつて國文を發達せしめ、同記によつて紀行文の典型を示し、古今集を撰んで勅撰集の模範を示し、歌人の啓蒙奨励と古歌の保存とに資し、同集序文によつて歌論や歌學の端緒を開き、多くの秀詠を創作したこと。歌風は辭句の使用に注意してゐるが情熱的でなく、精緻穩健なる技巧的歌人。作品に歌は古今集(合撰)、續萬葉集(未傳)、新撰和歌集、家集に紀貫之集十卷、歌仙家集、國文では古今集序文、同歌の詞書、大堰河行幸和歌序、土佐日記、漢文では新撰和歌集序文等。

〔凡河内躬恆〕 祖先は未詳。和泉權掾に歴任し、六位に陞る。延喜七年(一五六七年)歿、年四十九。古今集撰者の一人で、集中第一の歌人。歌風は機智縱横で多感多恨の才人の風あり、抒情、叙景共に巧で名詞止の歌多く、金葉、詞花集時代の先驅をなしてゐる。古今集に五十餘、後撰集に二十餘首採られ、家集に凡河内躬恆集。

〔相次いで現れた勅撰和歌集〕 平安朝時代の勅撰集は、古今集以下、後撰集(村上帝勅、天曆五年)、拾遺集(花山院勅、長徳年中)(以上古今を含め、代集)後拾遺集(白河院勅、應徳三年)、金葉集(白河院勅、大治元年)、詞花集(崇徳院勅、仁平年中)、千載集(後白河院勅、文治四年)。

〔千載集〕 千載和歌集。二十卷。後白河院の院宣によつて、藤原俊成が文治四年(一八四七年)四月二十二日に撰進した。歌數千二百八十四首。撰者は金葉、詞花集の粕をなめす直ちに三代集につぐ立派な撰集たる抱負で高尚幽玄を旨として撰んだ。薩摩守忠度の「さなみや志賀の」、西行の「鴨立澤」の歌や、鴨長明が一首採られたのに大悦したこと、道因法師の幽霊のことなど、歌學上の逸話を生んだ集で、八代集中出色の集。歌風を能く知る爲に源俊賴の歌を左に、
烟かと室のやくまをみしほどにやがても空にかすみぬる哉(源俊賴)

〔西行〕 藤原秀郷九世の孫、俗名佐藤憲清(又義清)といひ、鳥羽上皇の北面の武士で、弓術を以て左兵衛尉に任ぜられてゐたが、従弟憲康の死にあひ出家した

のが二十三歳、後全國に吟詠行脚を試み、建久元年、(一八五〇年)二月十六日寂、年七十三。歌風は自然美憧憬、厭離穢土の色強く、人間味豊かで實感の作最も多く、即興歌に傑作があり、形式方面は譬喩が適切で反復法に妙がある。家集に山家集がある。

いつの世にながき眠の夢さめて驚くことのあらんとすらん

〔山家集〕 ヤマガシフともいふが前者が普通。一卷。西行法師の家集で生前自撰して周嗣といふ知人に與へたが焼失したのを、周嗣が一首々々を違へずに暗書して保存してゐたといふ。西行の歌風を知る唯一の物。

〔神樂〕 神樂歌。平安朝初期からあるもので朝廷の儀式や諸社の祭に行ふ舞樂に用ひられた歌謡。神前舞樂の風は天の岩戸前の「歌えらぎ」からで風俗としては古い、形式の制定されたのは奈良末期から平安初期の事で、中期以後まで盛行した。短歌の形式を成すものと俚謡からとつたものとの二形式があり、短歌調のものも、句を反復したり拍子が加つたりして三十一字の典型から脱してゐる。内容には神事を初め戀愛、自然を詠じたもの、諷刺的なもの等種々ある。歌曲は一

條帝頃制定されて三十八曲ある。

みやまには、みやまには、あられふるらし、外山なるまさきの葛、色づきにけり(庭燎)

〔催馬樂〕 奈良末期から平安初期にかけて坊間に傳誦した俗謡。朝廷に入つてから純器樂の唐樂と入れませめて宮廷音樂となつてから、雅樂としての地歩を占めたもの。古代人民の素朴な内生活を響かせてゐる上に今様、宴曲、謡曲、小歌を展開させる歌謡の淵として後世の影響は甚大。歌詞は古今集や當時有名歌詞をそのまゝ採つて囃を加へ曲附したのが多い。内容によつて分けると戀歌が二十七種、諷刺が十五種、祝賀儀式が八種、叙景が五種、人事が三種の六十種で、奈良末期に淡海三船が催馬樂譜を撰定して、以後五度も手を加へ、現行のは光格帝時代の制定のもの。

さはだ川、袖つくばかり、淺けれどハレ(一段)あさけれど、くにの宮人、高橋わたす(二段)アハレ、ソコヨシヤたかはしわたす(三段)(諷刺のもの、澤田川)

〔今様〕 今様歌。當世風の歌の義で當時の新體詩の意。平安中期から始つて鎌倉初期にかけて盛行した一種の

俗語。七五調で四句、八句、十二句から成る。和讃に基ついて出來たもの。佛教的内容が多い。

〔和讃〕 和讃は佛教思想の弘布と共に梵漢譯の系統をひくもので、欣求淨土の意を述べたものが多く、七五調で天台宗に多い。佛會歌詠として、和語の偈頌と見るべき律語體の讃及び散文と律語體との教化及び朗詠の如き訓伽陀といふ三種ある中の一。教祖碩德讃、(舍利讃歎、天台師和讃、舍利講式和讃、智證大師和讃、慈慧大師和讃)と教義讃(空也和讃、本覺讃、阿彌陀和讃、極樂六時讃、來迎讃)とがある。その一例として空也和讃を擧げておく。長夜の眠獨りさめ、五更の夢に驚きて、靜かに浮世を觀すれば、僅かに利那の程ぞかし。

時光程なく移りて來て、五更の天にぞなりにける、念無常の我が命、いつか生死に陥ちざらん。人命無常停らず、山水よりもはなはだし、僅かに今日まで持ても、明日の命は期しがたし。

〔朗詠〕 奈良朝頃に起り、平安中期に催馬樂より少し遅れて盛行した。詩文の佳句を二句づつとつて曲節をつけ、琴や琵琶に合せて吟ずるもので、その多くは四

六駢體の二行を朗詠した。文選、白氏文集、唐詩選などの流行した時代の産物である。藤原公任の和漢朗詠集、同基俊の新撰朗詠集がある。

〔假名が發明云々〕 俗説では吉備眞備(一四三五年歿)が片假名を、弘法大師(一四九四年歿)が平假名を發明して傳へたといふが、實はこの時代に徐々に成立し發達したもので、以前は萬葉假名であつた。字形を優美にするためや、風雅を好む趣味上、變體假名も用ひられた。

〔文徳、清和兩天皇の頃〕 第五十五代文徳天皇は一五一〇年から一七年まで、第五十六代清和天皇は一五二八年から一五三五年まで在位された。

〔物語〕 説話の義から説話を綴つた物語書きの意で、作者の想像によつて脚色した小説的物語の意で、王朝期の和文の小説は大方これである。

〔歌物語〕 傳奇物語系統に對して發生した平安朝散文の一系統で、和歌流行に發育されたもの、和歌を骨子として想を構へた小説的物語。

〔傳奇物語〕 歌物語系統に對して發生した平安朝散文の一系統で、事實あり得べからざる神秘怪奇的空想を

盛つた小説的物語、Romance にあたる。

〔伊勢物語〕 二卷。作者に在原業平が擬せられてゐる。ある男の戀物語とその戀愛贈答で、百二十六段から成り、各段「昔男ありけり」の書出しである。文學史的價値は物語中の事實に即したものは歴史物語へ、戀愛譚は官廷中心の物語の本流へと流れ、後世の文學に展開した點である。

〔大和物語〕 一卷。作者未詳、天曆年中の作。歌を中心とした趣味ある百七十種くらの話を集めたもの。伊勢物語のやうに一貫した筋ではないが、各段の主人公の男女の實姓名も年次も記されてゐる點、歌物語もの、一系統として價値がある。

〔竹取物語〕 竹取翁物語。一卷。作者に源順が擬せられ、延喜より少し前の作とされ、現存小説中最古のものでロマンチックな作。竹を切つて生計する翁が或時竹の中から一少女を得て養ひ、容貌美しいのでかぐや姫と名づけた、貴人これを娶らうとして苦心したが應ぜず、天皇の召にも應ぜず月宮に歸るといふ筋。支那神仙思想を日本化して王朝情趣を出した點に特色があり文學史價値は從來の歌物語の境から脱した人物事件を

取扱つた最初の小説であること。

〔落窪物語〕 四卷。源順作に擬せられてゐる。繼子いぢめの筋の寫實小説。男三十二人、女二十七人の性格がよく描かれ、紛雜した筋を手短かにまとめ、每段變化を設けてゐるのが特色。篇中消息文、和歌が多く、歌物語の延長であること、後世繼子いぢめ物、嫁いぢめ物の形を作つたことに文學史的價値がある。

〔紫式部〕 藤原冬嗣の裔、越後守爲時の女。幼より聰慧で父を歎稱せしめた。同族の宣孝に嫁し二女大貳三位と辨局とを生んだが夫の死後寡居し、一條帝の中宮上東門院に仕へ、その間源氏物語を著す。生歿未詳であるが、長元四年(一六九一年)五十七で歿したといふ。源氏物語の他に紫式部日記があり、歌集に紫式部集がある。

〔清少納言〕 歌人清原深養父の孫、一條后定子に仕へた。生歿未詳。紫式部の源氏物語に對して枕ノ草紙を以て名がある。才氣發洩機智頓才に秀でてゐた。歌集に清少納言家集がある。

〔枕草子〕 後に説く。

〔源氏物語〕 五十四帖。作者紫式部。前四十帖は光源

氏君を主人公とし、後の十帖は源氏の子薫大將を中心としてその半生を、中間の四帖は源氏薨後の六條院の様子を寫してゐる。場面は須磨、宇治にもとるが多く京洛の地で、人事と自然を融和しながら王朝の人間生活を活寫した理想的寫實小説で、日本文學、世界文學史上の金字塔である。長所は結構複雑にも拘らず取捌の巧緻なること、人物の性格がそれぞれ具つて個性が現はれてゐること、照應對照の精細なること、自然と人事と融合して景情一致の妙を發揮してゐること、文章上省筆、對話の巧妙であること等。

〔枕草子〕 清少納言記。十二卷。作者清少納言。作者が日常の見聞、感想を順序なく書きとめたもので、百六十種の題段。内容は自慢話、若い殿上人に對する批評、自然及び人事を精細に觀察してゐること等、思ふまゝに印象的に描寫してゐるのが特色。隨筆文學の最初。源氏と並稱されて後世隨筆雜纂類へ影響した。

〔土佐日記〕 一卷。紀貫之の作。作者が承平四年（一五九四年）土佐守の任滿ちて歸京する時の旅日記で、紀行文の最初のもの。承平四年十二月二十一日土佐國府を發し、大津から船出し、日數を重ねて二月六日に難

波津に着き、淀川を溯つて十六日に自邸に入つたまでを輕妙平淡な雅文で綴つたもの。後世の日記紀行文の嚆矢として文學史的價値をもつ。

〔更科日記〕 更級とも書く。一卷。作者は菅原孝標の女とのみで實名未詳。蜻蛉日記の作者藤原倫寧の女の姪。治安三年父の任地の上總から上京する時に筆を起し、康平元年夫の橋俊通の死後の哀傷で終る。夢に關する記事、夢に現はれる神佛とそれへの憧憬の美化が一種の信仰にまで進んでゐる。秀れたロマンチックな作品。蜻蛉と共に双壁。

〔和泉式部日記〕 和泉式部物語。一卷。作者和泉式部が上東門院に在任中、長保五年（一六六三年）四月より翌正月までの日記で、主として執道親王との情事を精叙してゐる。情熱をそのまま告白したものととして尊ばれる作。

〔狭衣物語〕 四卷とも八卷とも、作者は大貳三位とも辨局ともいふが、六條齋院の侍女の宣旨が擬せられて永承天喜の頃の作とされてゐる。源氏以後の源氏模倣の作として最初で秀作である。狭衣大將と源氏宮との戀物語で、肌ざはりの感觸や、妊娠の女の乳房などの

感覺的要素を露骨に描いてゐる。

〔今昔物語〕 宇治大納言物語。三十一卷。年代は王朝末期で、作者は源隆國といはれてゐる。「今は昔」の書出して和漢梵にわたり古今の雜話を平明な國文で綴つた佛教説話集で、本朝部二十一卷、天竺部五卷、震旦部五卷。東洋傳説を國語化し、集大成した點に於て比較説話學の上からも文學史上からも意義ある作で、伊勢、大和物語中の一要素である口碑傳説の中に佛教味を加味して佛教説話文學を成立させて今昔となり、且後世のこの種作品の續出を促した。

〔榮華物語〕 伊勢、大和物語中の一要素である史實談が宮庭に入つて歴史文學を成立させた。その初作が榮華物語で、從來の史書が漢文であるがこれは假名文である。系圖一卷合せて四十帖。作者は赤染衛門とも藤原爲業ともいふ。宇多帝の寛平年中から堀河帝の寛治六年まで約二百年間の事蹟を記したもので、關白道長の榮華を中心としてゐる。文體は冗長で平板無味であるが、漢語佛語を交へた點、鎌倉時代の和漢混淆文に近づく徑路を示してゐる。

〔大鏡〕 三卷。作者未詳「後出の増鏡、水鏡、今鏡と

共に四鏡の第一。白河鳥羽の頃の作。文德帝の嘉祥三年から後一條帝の萬壽三年まで百七十五年間。天皇十四代、左大臣冬嗣から道長まで二十人の大臣、その他雜事を列傳體に記してゐる。從來史書が編年體であつたのに對して新方法である。卷頭は世繼と繁樹との問答から始つてゐる點小説的結構で、この構想が以下の歴史物に範を垂れた。榮華物語が道長讚美であるに對して嚴正批判をしてゐること、當代俗語を自由に使つて勁雄であり人物事件が躍動してゐる點等文學的、又文學史的價値がある。

〔藤原一門の失脚〕 保元元年（一八一八年）に起つた保元の亂によつて藤氏は朝廷より追はれた。道長の全盛後百有四年。

鎌倉室町時代の文學

教授
語釋

〔鎌倉時代〕 第八十二代後鳥羽帝文治二年（一八四六年）に源頼朝が鎌倉に幕府を開いて天下の政權を握つてから第九十六代後醍醐帝元弘三年（一九九三年）五月北條氏滅亡まで百四十七年間の稱。成熟した前代文學の後をうけて新時代文學の武家を背景とした新文學様式を生んだ時代。だが創造的意義に乏しい過渡期的文學で、追憶回顧の文學時代。文學史的區分は前期を仁治頃までの舊套文學時代（約五十年間）とし、後期を元弘前後までとして建長文永を中心とする新興文學時代（約八十年間）とする。前期の代表作は新古今、金槐集後期は平語以下の軍記物と方丈記以下の佛敎文學。

〔室町時代〕 第九十六代後醍醐帝建武二年（一九九五年）に足利尊氏が京都室町に幕府を開いてから第七百七代後陽成帝慶長八年（二二六三年）に徳川家康が江戸に

幕府を開いたまで二百六十八年間の稱。文學史的區分は前期は南北朝（吉野朝）時代で建武元中年間の思潮動搖時代（約六十年間）であり、中期は南北合體以後、室町中心の時代で應永元龜年間の享樂文藝時代（約百五十年間）であり、後期は安土桃山（織田豊臣）時代で天正慶長年間の思想低迷時代（約五十年間）。

〔度々の戦亂〕 古くは保元の亂（一八一六年）、平治の亂（一八一六年）から源平の争となり平氏壇浦に滅亡（一二八五年）する等、降つては鎌倉幕府中に演ぜられた肉身（頼朝と義経等）功臣の争ひ、更に承久の亂（一八七九年）には後鳥羽上皇隠岐に還幸、文永（一九三四年）と弘安（一九四一年）の外寇等人心極度の不安に馳られた。

〔新古今集〕 新古今和歌集二十卷。後鳥羽院の院宣によつて元久二年（一六九五年）三月の撰進。撰者は藤原有定、同定家、同家隆、同雅經、源道具の五人。春、夏、秋、冬、賀、哀傷、離別、羈旅、戀、雜、神祇、釋敎の十二門。歌數一千九百七十八首で、凡て短歌、序文の國文は攝政良經、漢文は日野親經。和歌の取り方は遠く萬葉時代にまで及んでゐるが、前代の作は特

に當代の格調に合致させるため改作をしてゐる。歌風は金葉集以後勅撰集の辿り來つた道程を示すもので、千載集に表はれた融合折衷主義の繼承で、その上古今集への復歸的氣分を匂はしてはゐるが、形式上の特質として本歌取りの歌の多いこと、技巧として直喩、隱喩、擬人法等盛んに行はれ、辭句の彫琢による巧緻な表現は舊想から清新の氣を見せ、又助詞助動詞の省略體言止め、三句切れ等多く格調の上に新彩がある。内容上からは思想に一段の深味を加へ、戀の歌に複雑な心境を自由に表して居り、いはゆる幽玄思想が中心である。叙景歌最も秀で情景融合の獨自の世界を出してゐていはゆる丈高き歌として稱讃される。古今集以後この集までを八代集と呼び二十一代集中古今と共に重視されてゐる。「苦しくも降りくるものかみわが崎さのゝわたりに家もあらずに」（本歌——萬葉集）「駒とめて袖うち拂ふ蔭もなし佐野のわたりの雪の夕暮」（定家）「見わたせば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋となに思ひけん」（後鳥羽院）

〔後鳥羽天皇〕 第八十二代後鳥羽帝は建久九年（一八五八年）正月第八十三代土御門帝に讓位されて院政を

行はせられたので以後院號を以て呼ぶ。高倉帝の第四皇子。御諱尊成。承久亂によつて隠岐に崩せられた、時に延應元年（一八九九年）二月二十二日、六十歳。政治文學共に御熱心で、天曆以後絶えてゐた和歌所を再興（建仁元年）して撰歌や歌會の業を興し、新古今集を撰ばれ、又古集第一の大規模である千五百番歌會を催しなされたり、和歌の革新に意を注がれた。隠岐還幸中も在京諸臣の詠を取り寄せて御一人で御歌合を催されたりした。和歌以外琵琶、蹴鞠に熱達されてゐた。大家の歌風を評して作られたものに後鳥羽院御口傳がある。秀歌多い。「我こそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け」

〔藤原定家〕 又サダイ。俊成の子。新古今の代表歌人で國文學者。高倉、安德、後鳥羽、土御門、順徳、後堀河の歴朝に仕へ、權中納言で京極中納言ともいふ。仁治二年（一九〇一年）歿。年八十。後鳥羽上皇の和歌所復活と共にその寄人を命ぜられ新古今集撰者の一人となり、後堀河の朝に單獨で勅撰集を撰んだ。小倉百人一首も彼の撰といふ。家集に拾遺愚草三卷、同員外二卷。入選歌は新古今に四十首、勅撰集に十

五首、新後撰集に四十首。歌學書の近代秀歌は詞古想新を目標とし典雅で妖艶で餘情の深い歌を唱へ、詠歌大概では歌道の修養觀を述べ、毎月抄では歌論十體を唱へて後進を指導した。以上三書は後世二條派の歌論の金科玉條である。歌風は父俊成と同じく推敲に重きをおいた。前項新古今集中の歌例に引いたやうな秀歌が多い。「大空は梅の匂にかすみつゝくもりもはてぬ春の夜の月」

【家隆】 又イヘタカ。光隆の子。定家と並稱された歌人。後鳥羽上皇の時從二位宮内卿に進んだ。嘉禎四年（一八九七年）歿、年八十。壬生二位ともいふ。家集に壬二集五卷。歌風は即興的で平明優雅で清新な叙景歌が多く情景融合の秀歌があり、晩年は佛教的觀照の眞想に富む。新古今以下新續古今に至る勅撰に入つた數は二百二十六首。「あけばまた越ゆべき山の峰なれや空ゆく月の末の白雲」

【將軍實朝】 鎌倉第三代の征夷大將軍。官は右大臣。八歳父頼朝に訣れ、十二歳將軍職に就く。十四歳始めて歌十二首を詠み、十八歳定家に點を乞ひ近代秀歌を手にし、二十二歳定家より家傳の萬葉集を贈られて大

いに悦んだといふ。二十八歳公曉のため刺された、時に承久元年（一八七九年）正月であつた。將軍といふよりも歌人として名高く特に萬葉調を詠んだ。二十歳以前は新古今、古今の風、以後は萬葉風であつた。歌風は表現が自由で想調共に雄大。家集は金槐和歌集三卷。「ものゝふの矢なみつくろふこての上に霞たばしる那須の篠原」

【金槐集】 金槐和歌集。三卷。鎌倉三代將軍源實朝の家集。金は鎌の扁、槐は大臣の唐稱槐門の槐によつて命名、又右大臣家集ともいふ。春一一〇、夏三八、秋一一七、冬七六、賀一八、旅二四、喪一四一、雜一〇四、他六六、計六九三首。歌風は前期は新古今、古今の風、後に萬葉調。當時の歌風が詞華の絢爛と格調の巧致とを求めた中に萬葉調の眞直な調高い歌風を以て和歌史上に輝いてゐた。叙景清新、平易淡快な作に「青柳の糸もてぬける白露の玉ふき散らす春の山風」、情景融合優雅な作に「ものいはぬ四方の獸すらだにも哀なるかなや親の子を思ふ」、高想雄大な作に「箱根路を我こえくればいづの海や沖の小島に浪のよる見ゆ」等最も名高く、古今新古今風のものに「昨日こそ夏は

くれしか朝戸出のころも手寒し秋の初風」

【雄渾な調べ】 雄々しく力強い思想のあらはれ。こゝは金槐集中の「箱根路」等の歌の如きをいふ。

【歌壇門閥の對立】

これを史的に眺めてみる。平安末期には六條家が歌學の中心であつて、藤原顯季、その子顯輔（詞華集撰）、その子清輔（續詞華集撰）と三代續いて門閥を固めた。それに對立したのが藤原俊成で幽玄を理想として千載集を撰び、古今風體抄を著して名揚り、六條家の上に立つに至つたが、その子定家は俊成の歌論を大成し（近代秀歌、詠歌大概、毎月抄）て紛騒の歌壇を統一したが亦門閥黨争が起つた。平安末期に音律、蹴鞠、書道等と世襲家が新に生じたが、それに對して和歌世襲家として確立したのが定家の子爲家であつた。その子爲氏、爲教、爲相は各二條、京極、冷泉と三家を立て、所領感情の争が歌論にまで及んで各攻撃し合ひ、爲氏の子爲世、爲教、爲兼の代に至つて更に擴大されて皇室にまで及び、爲世が大覺寺派に用ひられると爲兼は持明院派に用ひられたりして、風雅の争が轉じて利慾、政治にまで及んだ。勅撰集の撰者も時の皇室が大覺寺或は持明院であることにより

或は二條家、京極家であつたりした。左表の如くである。



【和漢混淆文】 又、和漢混合文。文體の一種。漢語と和語とを混用し、措辭文脈に於ても漢文和文を折衷して渾然たる文の一體を爲したもの。語句のみの和語漢語の混用は萬葉集時代にも見えるが、眞の意味のそれは鎌倉時代の軍記物や東關紀行、海道記等の紀行や方丈記等の隨筆物に至つて見られ、室町時代の謡曲もこれであり、徳川時代に入つて進歩し、新井白石の藩翰譜、折たく柴の記、貝原益軒の書等は殊に名高く、現代普通文の先驅である。

【軍記物語】 後に説く。

【源平二氏の隆替】 源平二氏の興亡に同じ。平氏は清盛保元平治の亂によつて大功を立て太政大臣に墜り一族大いに隆榮したが文治元年（一八四五年）三月、壇

浦の戦で源氏のために敗潰されるまで僅かに二十九年間、源氏は平氏に代つて大に隆興し、頼朝は鎌倉に幕府を開き建久三年（一八五二年）七月征夷大將軍となり、頼家を経て三代將軍實朝が承久元年（一八七九年）正月刺客に遭つて源氏亡びるまで僅かに二十七年間であつた。

〔軍記物語〕 廣義に解して戦争のことを書いた文學とすると鎌倉時代以外徳川時代にも出来た戦争の記録全部をさすが、こゝでは狹義の意である。鎌倉、室町時代に新興した戦争を題材とした文學作品をいふ。戦記物、軍記物。文體は華麗流暢な和漢混淆文で、尙武、剛勇、忠節、禮儀、廉恥、雅懷、任侠等凡て作者が印象深い事象は見のがさず記して、所々自家の學殖を示したやうな和漢梵の故事を引き、義理と人情の苦悶の爲には情を犠牲にして正義に斃れる悲壯さを讚美してゐる。印象本位であるから史實の忠實な記述とはいへないが、歴史小説に近い手法で立派に始終頭末を書きこなしてゐる。保元物語、平治物語、平家物語、源平盛衰記、太平記等代表作。五大戦記といふ。

〔保元物語〕 三卷。軍記物語の最初の作。作者未詳。

或は葉室時長ともいふ。保元の亂を中心にして源爲義父子の悲運の歴史を叙したもので、後白河天皇即位の事に筆を起し、源爲朝鬼界が島の死に終るまで三十九章。和漢混淆文。

〔平治物語〕 三卷。作者未詳、或は葉室時長ともいふ。平治の亂の原因である信賴、信西の軋轢から頼朝が征夷大將軍の院宣を蒙るまでの事を記したもので、保元物語が爲義一家の歴史を叙したのを受けて、義朝一家の榮枯盛衰を述べてゐる。和漢混淆文。

〔平家物語〕 普通十二卷。今日の形をとるに至つたのは建長四年（一九一二年）頃であらうとも或は原本は建久頃から承久の亂（一八八一年）以前に出たかともいはれてゐる。異本多く十七種類七十色もあるといふ。その中の長門本は平家物語と源平盛衰記との中間に位置するもの。作者も信濃前司行長の原作を藤原時長、吉田資經等によつて増補されたともいふ、確説がない。清盛の祖先と父忠盛出世の事に筆を起して清盛の榮達とその一族の繁榮を叙し、源氏の興起によつて終に西海に亡びるまでの顛末を述べ、最後に清盛の女高倉帝の中宮建禮門院の崩御に筆を納めてゐる。平家一族の榮

枯盛衰を記すのを主眼とした。文章は文調が緊縮してゐて、武士語、佛語、漢語、俗語、雅語の折衷體で、音便が増加してゐて、七五調で朗誦に適してゐて、琵琶に合せて語はれてゐた。戦争の場面等印象鮮かに描寫されてゐて、人情描寫が緻密であり、無常人生觀の文であり、實力本位の世相を描いてゐて、義理のため人情を犠牲にした悲劇の叙事詩であり、回顧の感傷に富んでゐること等が特徴である。後世文學に影響すること甚大。

〔平家二十年〕 壽永二年（一八四五年）七月平宗盛安徳帝を奉じて西走する迄、約二十年間の平氏全盛時代。

〔全篇を貫くに云々〕 平家物語は巻頭「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す。驕れる者久しからず、たゞ春の夜の夢の如し。猛き者も終には亡びぬ。偏に風の前の塵に同じ」といふ無常觀で一貫してゐる。

〔曲節を附し琵琶に云々〕 平曲、平家琵琶のこと。後鳥羽院の時、信濃前司行長が平家物語を作つて叡山の正佛（郡曲の名家綾小路家の出で源資時）といふ盲人に語らせたのに始るといふ。

〔源平盛衰記〕 四十八卷。作者は葉室時長といふが未詳。二條帝の應保年中から安徳帝壽永年中まで凡二十餘年間の源平二氏盛衰の事蹟を記した和漢混淆文。盛衰記と同一事實を傳へた平家物語があるが、平家物語に比して詩趣に乏しく含蓄の妙味がないが、その叙述は精細で描寫が自由である。平家物語の後に出来たものとされてゐる。

〔鴨長明〕 鴨縣主の後裔。二條帝應保年間に從五位下に叙せられ、高倉帝の御代、父の後をついて賀茂の社司を乞うたが許されなかつた。土御門帝の建永年間大原山に閑居し、建保四年（一八七六年）六月歿、年六十三。佛教的厭世思想家で、孤獨であり、天變地異の續出の時代であつたり、志が得られなかつたりしたので遁世して蓮胤と改めた。和漢梵の古今にわたる學殖は方丈記に現れてゐる。後鳥羽上皇の和歌所の寄人の一人ともなつた。歌は千載集以下の勅撰に入る。長明集がある。歌學書に無名抄、他に發心集、瑩玉集、文字鏡等、彼の作といふ。「思ひあまり打ぬる宵のまほろしも浪路をわけて行きかよひけり」

〔方丈記〕 一卷。鴨長明の隨筆。巻頭に世相の變易と

人生の無常とを説き、次に彼が見聞した天變地異の慘禍、安元の大火、治承の辻風、養和の饑饉、天曆の地震等を叙して、これを事實に立證し、進んで世に處するの難きと一身の不遇とによつて遁世したことを述べ最後に閑居のことを精叙してゐる。全篇よく一貫した堂々たる議論文で論文の最初とされてゐる。文體は和漢雅俗を折衷して更に一機軸を出して居り、文辭は婉麗清新で抑揚照應の妙があり、描寫が印象的である。文學史上の名篇。

〔十六夜日記〕 阿佛尼東くだり、阿佛尼海道記、阿佛坊道記ともいふ。作者、阿佛尼。弘安三年（一九四〇年）の作といふ。實子爲相の所領を繼子爲氏に横領されたので憤り遙々鎌倉に下り、訴へ出た紀行文。建治三年十月十六日に京を出て、二十九日鎌倉に著くまでを記し、他に消息がある。四年目に勝訴となつたが鎌倉で歿。文壇黨派の争の證として注意される作。土佐日記、更級日記等の紀行文を模倣してゐるが同時代の東關紀行、海道記の新文學と好對。文中歌もあり、道中の風物に哀感を寄せたり、強い憤慨と温い母性愛とのある叙事的抒情文。

〔阿佛尼〕 歌人、文學者。平度繁の女。堀河院の女御安喜門院に仕へて四條と呼ばれた。歌人藤原爲家の後妻となり、實子と繼子との所領争で鎌倉に訴へ勝つたが、そこで歿。紀行文には十六夜日記、歌學書に夜の鶴。歌は續今古以下の勅撰集に入る。

〔海道記〕 二卷。作者は源光行といふが、鴨長明説もある。貞應二年（一八八三年）卯月上旬に京を立つて、同十八日鎌倉に下るまでの道中の光景を和漢混淆文で書いた紀行文。

〔東關紀行〕 一卷。作者は鴨長明、源親行、光行、それ以外の者ともいつて未詳。仁治三年（一九〇二年）秋八月中旬都を立つて十餘ヶ月を経て鎌倉に下つた紀行文で、文體は駢儷體の和漢混淆文で、處々記事の不精確や修辭の拙劣な點があるが、海道記と共に當代新文學の一として注意されるもの。

〔宇治拾遺物語〕 十五卷。作者宇治大納言隆國、建保（一八七三—一八八一年）頃の作。百九十六種の説話集。内容は主として佛教説話と巷談との二様式より成り、教訓的なもの、童話的なもの、逸話奇聞のもの等多種多様。文學史的に見ると今昔物語の系統を引く小話蒐集

であり、その中の佛教説話が宗教文學に流れこんでその世俗的要素の多分に含まれたものが宇治拾遺物語、十訓抄、古今著聞集等の説話文學となつた。本書にも今昔物語の説話と同じもの八十六、江談抄や大和物語は若干、古事談は三十三の同話がある。今昔物語の續編と見られる。

〔十訓抄〕 三卷。作者橋成季、菅原爲長ともいふが六波羅二藤左衛門入道が眞に近い。建長四年（一九一二年）の序がある。教訓的説話を十段の篇に分けて、民衆指導の目的のために積極的消極的に幾多の例話を示して居り、和漢の古典、前代の作品からも材料をとつてゐて、圓熟した和漢混淆文で記してゐる。中心の儒佛思想も消化されてゐるのが特色。

〔古今著聞集〕 作者橋成季。建長六年（一九一四年）今昔物語、江談抄の系統の逸事巷談集。神祇釋教以下三十門に分つ。説話は今昔、江談抄、日本靈異記等の古典記録から十訓抄や當時の巷談からとつてゐる。内容は時代思潮の反映として神佛混淆説や迷信怪談が多く、好色篇には官廷小説の名残を留め、滑稽談もある。

〔世は益々亂れに亂れ〕 源家は三代で滅び、藤原頼

經、頼嗣、或は宗尊、惟康、久明、守邦の諸親王將軍職についたが實權は執權北條氏の手にあつた。その間文永（一九三四年）弘安（一九四一年）の外寇にあひ人心不安となる。更に皇統は大覺寺と持明院とに分れ、皇室對幕府の間悪化して後醍醐帝は後鳥羽帝以來の志を繼いで討幕を圖り、元弘の亂となり、執權高時は光嚴院を立てた。北條氏滅びて建武中興の世となつたが足利尊氏の叛は再び延元の亂となり二年（一九九七年）八月尊氏は光明院（持明院統）を立つ。後醍醐帝は吉野に遷幸し、茲に吉野朝（大覺寺統）を南朝、持明院統を北朝と呼んで南北朝時代、五十七年間の大争亂の世となつた。

〔吉野朝〕 延元元年（一九九六年）十二月第九十六代後醍醐帝が京都花山院より神器を奉じて大和國吉野に潜行せられた以後、元中九年（二〇五二年）十月第九十七代後龜山帝が京都に還幸せられ、神器を第百代後小松帝に授けられたまで五十七年間の朝廷。

〔足利氏の世〕 延元三年（一九九八年）に足利尊氏が北朝光明院より征夷大將軍の宣旨をうけて京都室町に幕府を開いてから第十五代義昭が天正元年（二二三三年）

織田信長に逐はれるまで二百三十六年間の時代。

〔義滿〕 足利第三代の將軍。義詮の子。天授四年京室町の第に移つて政治をとる。元中九年(二〇五二年)南北兩朝を合一し、應永元年職を子義持に譲り、奏請して太政大臣に拜せられ、翌年辭し入道して天山と號した。三年金閣寺に移る。三管領四職を定め、幕府の基礎を固めた。八年明と通交を求めた。十五年(二〇六年)五月薨、年五十一。

〔義政〕 足利第八代の將軍。義教の二男、兄義勝の薨後迎へられて嗣となる。子なく弟義視を還俗せしめ子が生れても僧にすると約して嗣としたが、子義尙が生れ夫人はこれを僧とするに忍びず、山名宗全に托し、義視を廢して義尙を立てんと謀つた。是が應仁の亂の原因となつた。文明十五年東求堂を東山に造る。銀閣寺といひ北山の金閣寺に比した。第九代義尙薨後再び政を聽く。延徳二年(二一五〇年)正月薨、年五十六。太政大臣を贈る。

〔謠曲狂言〕 後に説く。

〔新古今以後云々〕 こゝに勅撰集の二十一代集をあげる。古今集(醍醐帝。紀貫之、凡河内躬恒、紀友則、

壬生忠岑。延喜五年)。後撰集(村上帝。源順、大中

臣能宣、紀時文、清原元輔、坂上望城撰。天曆五年)。拾遺集(花山帝。藤原公任又は花山帝撰。長徳元年)。以上三代集)後拾遺集(白河上皇。藤原通俊撰。應徳三年)。金葉集(白河上皇。源俊賴撰。大治二年)。詞花集(崇徳上皇。藤原顯輔撰。仁平元年)。千載集(後白河上皇。藤原俊成撰。文治三年)。新古今集(後鳥羽上皇。源道具、藤原有家、同定家、同家隆、同雅經撰。元久二年)。以上合して八代集)新勅撰集(後堀河帝。藤原定家撰。貞永元年)。續後撰集(後嵯峨上皇。藤原爲家撰。建長三年)。以上合して十代集)。續古今集(後嵯峨上皇。藤原家良、同基家、同爲家、同行家、同光俊、寂蓮法師撰。文永二年)。續拾遺集(龜山上皇。藤原爲氏撰。弘安元年)。新後撰集(後宇多上皇。藤原爲世撰。嘉元二年)。以上合して十三代集)。玉葉集(伏見上皇。藤原爲兼撰。正和三年)。續千載集(後宇多上皇。藤原爲世撰。文保三年)。續後拾遺集(後醍醐帝。藤原爲藤、同爲定撰。正中二年)。風雅集(花園上皇。花園上皇撰。貞和二年)。新千載集(後光嚴帝。藤原爲定撰。延文四年)。新拾遺集(後光嚴帝。藤原爲明、

頓阿法師撰。貞治三年)。新後拾遺集(後圓融帝。藤原

爲重、同爲遠撰。永徳三年)。新續古今集(後花園帝。飛鳥井雅世撰。永享十年)。以上合して二十一代集)

〔新續古今集〕 新續古今和歌集二十卷。後花園院の勅により飛鳥井雅世の撰。永享十年(二〇九八年)八月二十三日四季の部を奏覽。前後六年を費した。勅撰集中最終のもの。二千百四十四首、南朝方のは御製と降伏者の詠とだけを收めるにすぎなかつた。歌風は至極平凡で沈滞しきつてゐる。「なには瀉鹽焼く烟たちそひて霞もなびくうら風ぞ吹く」(雅世)

〔新葉和歌集〕 二十卷。長慶帝の勅によつて勅撰集に准ぜられたもので撰者は宗良親王、弘和元年(二〇四一年)十二月上奏。(従來は後龜山帝の勅許によつて准勅撰とされてゐた)撰の動機は當時の勅撰集は皆北朝方の手によつてのみ選ばれて、南朝(吉野朝)方には勅撰集なくその君臣の歌が葬り去られるのを歎いて選ばれた。後醍醐帝の元弘の初めから長慶帝の弘和元年まで凡五十年間の南朝方の歌總數千四百二十首。春、夏、秋、冬、離別、羈旅、神祇、釋教、戀、雜、哀傷、賀の部に分つ。歌風は修辭が稍粗笨ではあるが永

年大義名分のために苦をなめた人々の詠であつて實感

の迫るものがある。形よりも想に優秀作が多い。後醍醐帝、後村上院、嘉喜門院、尊良親王、宗良親王、前内大臣有光、文貞公等著名。

「臥わびぬ霜寒き夜の床は荒れて袖にはげしき山おろしの風」(後醍醐天皇)

「九重にいまもますみのかさみこそなき世を照す光なりけれ」(後村上院)

「萩が枝におけらん露の白玉を拂はで見せよ野邊の秋風」(嘉喜門院)

「君がため世のため何かをしからん捨て、かひある命なりせば」(宗良親王)

〔宗良親王〕 後醍醐帝の第八皇子。上野親王、信濃宮とも申す。十歳餘にして剃髪し尊澄と稱して妙法院に住され、後、三品に叙して天台座主となられたが、父帝北條氏討伐の事を謀るに及んで兄君護良親王と共にその事に預つたが、笠置城で捕へられ讃岐國に流された。元弘三年北條氏滅亡と共に京師に還り再び座主となり、延元元年足利尊氏の反の時遠江國井伊城に走つて東國を經略し、延元四年還俗して宗良と改名し、中

務卿となり征東將軍となられた。後、高師泰に襲はれて以後は駿河、信濃、甲斐、美濃、越中、越後の諸國を流浪され艱難されたが、文中三年に吉野に赴き天授三年（二〇三七年）に長谷寺に入り再び僧となり、信濃に往き河内山田に寓されたがその終は未詳。和歌に巧で家集に李家集。新葉集を弘和元年（二〇四一年）十二月三日に撰上した。

〔連歌〕 和歌の一體。上古には神武帝と大久米命の唱和、日本武尊と火燒老の唱和等あるが是等は片歌である、連歌として正しい最初のものは萬葉集中の「佐保川の水塞き入れて植ゑし田を」の尼の句に對して「刈るわさ稻はひとりなるべし」と大伴家持が答へたのを最初とする。かやうに古は短歌一首の上下二句を二人で詠んだものである。鎌倉初期に藤原定家、同家隆が漢詩の聯句に倣つて試みたのに起原がある、この頃は連歌の創始期で掛詞や縁語の軽い諧謔を弄する程度であつたが鎌倉時代になると雅麗典雅を旨とする有心派（柿本衆）と機智滑稽を旨とする無心派（栗本衆）との二派が生じ、後に柿本のみ行はれ蒐玖集以下の隆盛となつた。形式は十七字の長句と十四字の短句とを相連

ねて少きは二十約五十約百約多きは千句萬句にも及んだ。江戸時代の俳諧の形式に似て、その第一句を發句次の短句を脇句次の長句を第三句、最終の短句を擧句といひ、尙煩雜な法則がある。内容は可笑味を根本とし、各自獨立の間に連絡した思想があつてその各句にづらなる變化に妙味がある。

〔既に和歌の餘興云々〕 後撰集、拾遺集の勅撰集にもこの連歌を載せ、金葉集には特に連歌の目をたてるに至つてゐたが、之を連續するに及んでは續世繼物語花の主の巻にくさり連歌とあるのをはじめとして、後鳥羽帝の時、源家長が源氏國名の百約連歌、後鳥羽上皇の庚申百約連歌（藤原家隆等勅仕した）、寛喜二年正月の百約連歌（藤原定家等勅仕）があつて後益々盛んとなり、和歌につく一種の文藝となり、朝野共に連歌會を催した。その原因は漢詩の聯句の影響と歌人の勅撰漏れの不平のやり場と、射倅心の増大（賭物をかけた）とによつて益々盛んになつて行つた。

〔二條良基〕 後普光院ともいふ。關白道平の子。後醍醐、光明、崇光、後光嚴、後圓融の歴朝に仕へ天授二年に准三宮、弘和二年に攝政、元中五年（二〇四八年）

に關白となり即日辭退して薨じた、年六十九。名門多趣味の人で文學史上に影響すること多い。頼阿に和歌を、連歌を善阿に學んだ。功績は、當時の和歌を盛んにしたこと、新千載、新拾遺、新後拾遺の三勅撰の内助をした。連歌道の樹立として文和五年連歌最初の集で准勅撰たる蒐玖波集二十卷の撰、應安五年にはその法式の最初たる連歌新式（應安新式）を選んだ。その他の編著多く、有職故實に關するもの多い。

〔法式を定め〕 應安五年（二〇三二年）に良基と救濟が連歌の一般的方則を制定した。法式は百約を程度として定め、懷紙を堅に二折として表裏とし、更に横に四折とし、表裏に各十四句づつを書き最終の表と最終の裏とは各八句づつとした。その他五十約千句のこと。指合去嫌のこと、輪廻、遠輪廻、本歌取、賦物の取方等を規定してゐる。この新式以前に冷泉爲相の立てた方則があつたが行はれず、この新式は大いに迎へられ、後世永く連歌にも俳諧にも典據とされた。以後續出の兼載の連歌本式と、連歌新式を追加した兼良の連歌新式追加と、以前を集大成した肖柏の新式今案との三書を、後世連歌新式今案と稱してゐる。

〔宗祇〕 姓は三好、氏は飯尾。紀州の伎樂師の子といふ。號は自然齋、見外齋。後柏原帝より花の本の稱號を許された。歌道を東常縁に學び文明三年古今傳授を得た。それが古今傳授の始めであつた。連歌を猪苗代兼載に學んでその詩人的名聲を博した。一生を旅で送り、その足跡は九州奥羽に普ねく、文龜二年（二一六二年）七月箱根湯本の旅舎で歿、年八十三。著に吾妻問答、老のくりごと、筑紫紀行その他多く、後柏原帝の勅によつて撰した新撰筑波集二十卷がある。名句として「一年の月を曇らす今宵かな」がある。辭世に「はかなしや鶴の林の煙にも立ちおくれぬる身こそ怨むれ」

〔蒐玖波集〕 二十卷。北朝後光嚴帝文和五年（二〇一六年）二條良基の撰んだ連歌撰集の最初のもの。勅撰に准ぜられた。眞名序と假名序があり、勅撰歌集の方則により、部立は四季、神祇、釋教、戀、雜、羈旅、賀、雜體、發句等に分け、上代から當代まで、二千首を收め、作者は上下貴賤の各階級にわたつてゐる。集中の連歌は上下二聯のものばかりで長約はない。主な作者は良基、善阿、救濟、順覺、良阿、周阿などの

桑門、二品法親王、常磐井入道等の貴顯、武人に佐々本道譽、足利の一門。女流に後深草院少將等がある。從來和歌の餘戯でしかなかつた連歌を文學の領域までに引揚げた史的價值が大である。

〔新撰菟玖波集〕新筑波集、二十卷。後花園帝明應四年（二二五五年）宗祇が内勅によつて撰んだ連歌集。上は永享から當代迄約七十年間の連歌を四季、哀傷、戀、雜、發句に分類してゐる。作者は天皇をはじめ公卿武士で、桑門が多く代表作家である。心敬、宗砌、兼載、宗祇等。良基の菟玖波集、宗鑑の犬菟玖波集、季吟の新犬菟玖波集と共に斯道の經典である。

〔宗鑑〕本名志那彌三郎範重。山城國山崎に草庵を結んで山崎宗鑑といふ。足利將軍義尚に仕へたが二十五歳で出家。西國行脚して讃岐に行き一夜庵を結んでゐたが、天文二十二年（二二一三年）十月歿、年八十九。良基以來宗祇に來り大成された連歌の法式を無意味だとして新に俳諧を唱へ、想、用語、形式も自由で機智滑稽を旨として自在に言表さんとした。即俳諧の祖である。著、犬筑波集は俳書の最初。彼は機智の天才であつた。「切りたくもあり切たくもなし——盗人をとら

へてみれば我子なり」（宗鑑）

〔守武〕荒木田守武。宗鑑と共に俳諧を確立した人。伊勢内宮の神官、守秀の子。宗祇、宗長、宗牧等と連歌道に入り後連歌の拘束を脱して俳諧道に入つた。天文十八年（二二〇九年）八月歿、年七十七。その著獨吟千句は斯道の作法を示した。守武句集。「落花枝にかへると見れば胡蝶哉」

〔俳諧〕俳諧の諧謔的傾向は早く栗の本の連歌に發してゐたが、後鳥羽院の頃は柿の本が盛んで、栗の本は壓倒されてゐた。で、連歌が和歌に對立して起り、堂上から民衆の手に歸する時代の變化と共に創始期時代に復歸して滑稽を基調とする俳諧が生じた、その功は宗鑑、守武にある。で、在來の連歌と少しも變りなく、用語を自由にし制約を平易にし、連歌の民衆化を更に徹底させたものが俳諧である。徳川時代の松永貞徳（古風）西山宗因（談林風）に至り盛行し、松尾芭蕉（正風）へと發展した。

〔太平記〕四十卷。作者は文中三年歿の小島法師、北畠玄惠等數人の手になつたともいふが、吉野朝の末頃吉野朝方の手に成つたのは確。花園帝文保二年（一九

七七年）二月から後村上帝正平二十二年（二二一七年）まで五十年間の吉野朝前後の戦亂の事實を和漢混淆文で綴つたもの。特色は文辭が華麗で、佛語の引用が精緻で、誇大法、對句法を驅使し、道行文が流麗婉轉で語彙が豊富である等。書名は安危由來記、國家治亂記、國家太平記、天下太平記と四變したといふ。江戸初期太平記讀みが出て大いに愛讀された。

〔義經記〕八卷。作者年代は未詳、鎌倉末とも室町初とも或は足利義滿、義持時代で儒教風の教育をうけた公卿が義經傳説を集めたらしいといはれてゐる。源義經の一生に取材してゐて、後の義經物の源泉。文章は冗漫ではあるが描寫に眞實味がある。文學史的にみると王朝期の物語は個人の戀愛生活を寫し、鎌倉期の軍記物は各族の戦鬪生活を集團的に寫したが、この二つの傾向を融和して個人の戦鬪生活を寫しながら一面王朝式戀愛生活の情趣を漂はせた新傾向の作品の一が會我物語、義經記である。

〔會我物語〕十卷。作者年代未詳、室町期で叡山の僧かといはれてゐる。伊豆の豪族伊東氏の内訌に因縁する會我十郎五郎兄弟の復仇事件を骨子とし、これに大

磯の虎の情話を絡ましたもの。太平記風の戦記文學直系のもので、事毎に和漢の故事を並べ、用語に苦心の痕が見える。後世會我物の源泉。

〔増鏡〕二十卷。作者は一條冬良、同兼良、二條良基等擬せられてゐるが未確。年代は正慶二年から永和二年の間といふ。大鏡後の執筆の意でその名がある。四鏡の一。後鳥羽帝壽永二年（一八四三年）八月から後醍醐帝元弘三年（一九九三年）六月隱岐から還幸まで百五十一一年間の國文の史書で、承久の變、元寇、兩朝の起伏、元弘の亂、西園寺家の榮華、北條の權力等、平明典雅で情趣を描寫してゐるのが特色。大鏡につぐ名篇。

〔承久の亂〕後三條帝は藤原氏を抑へて皇權恢復を圖つたが、その後、保元以來、武人勢力を得て、武家政治の世となり、後白河法皇の討幕の志をつぎ後鳥羽帝は讓位をされて一意討幕に努力されてゐた時、鎌倉では北條義時は僧公曉をして實朝を弑せしめ實權を握つたのが承久元年（一八七九年）二月、後鳥羽上皇は好機として順徳上皇その臣藤原忠信、宗行、範茂等と謀り三年五月十五日義時追討の宣旨を發した。義時鎌倉にあつて十九萬餘騎を京に襲はしめた。六月十五日上皇

勅使を以て追討停止を諭した、よつて義時は兩六波羅探題をおいて京を制した。亂の結果後鳥羽上皇を隠岐に土御門上皇を阿波に順德帝を佐渡に移し、後堀河帝を擁立した。その他の臣多く斬られて皇威益々衰へ、武門の勢盛んとなつた。

〔元弘の亂〕 大覺寺統は改革的、持明院統は保守的であつた。大覺寺統の後醍醐帝は後鳥羽帝以來の志である討幕を念とせられてゐた。時に太子邦仁親王薨じ兩統儲位を争ふ、北條高時は持明院派後伏見上皇の皇子量仁を立てたが、後醍醐帝は皇子尊良世良二親王の中を立てようとした。後伏見上皇がこれを憤悲して石清水に祈る。帝遂に討幕の意を決し、尊雲(大塔宮)尊澄(妙法院宮)兩法親王を天台座主とし延曆寺で謀をさせ、又、世良親王の謀で奈良叡山の僧徒と通じた。幕府は疑つて元弘元年(一九九一年)五月廢立を謀り、僧圓觀、日野俊基を鎌倉に捕へた。帝怒り兵を徴し、延曆寺の僧徒等これに應じたが、帝は八月幕府の兵西上を諜知して叡山に幸し、笠置に移つた。楠木正成赤阪城に義兵を擧げたが、笠置陥り帝は六波羅に幽せられ光嚴帝が即位した。二年三月後醍醐帝は隠岐に、尊良

親王は土佐に、尊澄親王は讃岐に遷され、臣多く斬られた。

〔擬古文〕 中古時代以後に作られた中古文で、鎌倉室町の徒然草、増鏡等及びそれにまねて作つた徳川時代の國學者の作。こゝは前者の一名と見てよい。

〔北畠親房〕 具平親王の後裔。權大納言師重の子。和漢の學を兼ね、才文武に秀で、伏見、後伏見、後二條、花園、後醍醐、後村上の歷朝に奉仕し、殊に南朝の忠臣として文武の功があつた。元徳二年出家して宗玄と號し、元弘三年後醍醐帝隠岐より還幸につき再出仕、從一位、准大臣、正平六年准后。正平九年(二〇一四年)薨、年六十二。著書に職原抄、神皇正統記、元元集、東家秘傳、二十一社記、古今集註等。藤原宜房、源定房と合せて三房といふ。

〔神皇正統記〕 六卷。作者北畠親房、延元四年(一九九九年)の作。親房は常陸小田城に籠城、吉野朝の新帝(後村上帝)輔弼の任を全うすることが出来ないのを遺憾として洞院實世、四條隆資に旨を傳へて事を取行はしめ、尙帝王學の一端にもとてこの書を吉野に献上した。天地開闢から後村上帝までの史論で、一篇の主

旨は皇位繼承次第の大切なこと、南朝の正統なこと、大義名分を明らかにしたことであるが、中心思想は南朝正統論、論旨一貫明徹し、雄勁な筆致は國文國史上特筆すべきであり、更にこの書によつて後代の志氣を鼓舞させた。

〔藤原吉房〕 南朝後村上帝御代の人で吉房侍従と稱せられたが傳記は未詳、吉野拾遺によると先帝(後醍醐帝)崩御の後松柏の節操に因んで松翁と號して剃髮したことが知れるだけである。本書の松翁についても異説がある。

〔吉野拾遺〕 二卷。作者の松翁は藤原吉房だといふが他に足利尊氏の侍童命鶴丸とも吉田兼好の侍童命松丸ともいはれてゐるが、前説が多い。年代も未確で至徳以後とされてゐる。南朝二代(後醍醐、後村上)の見聞逸話、歌話を無系統的に説話文學形式で綴つたもので文章は平明典雅。

〔兼好法師〕 吉田兼好。南北朝時代の國文家で歌人。本姓卜部氏。山城國吉田にゐたので姓とする。後宇多院に仕へて左兵衛佐に任ぜられたが出家した。諸所幽棲して後雙ヶ丘に住む。博聞多識で趣味の人、神儒佛

老莊有職故實歌學の各方面に涉り、古典的な見方から清新な趣味論、常識道徳を説く。隨筆に徒然草。家集に兼好法師集。歌は新千載、新拾遺、新後拾遺に入る。頓阿、淨辨、慶運と共に和歌四天王といはれ、「手枕の野邊の草葉のしもがれに身はならはしの風の寒けき」によつて手枕の兼好といはれた。

〔徒然草〕 二卷。作者吉田兼好。建武三年前後の作。和漢の故事、人事、自然の百般に涉り、記事、叙事、評説、人情風俗、人生の無常を論ずる等、百四十三段に分れてゐるが、中にも一貫した連想の糸でつながつてゐるのが妙味。思想は佛教の無常厭世、老莊の虚無尙古、情念偏重、現實謳歌の平安朝思想等で複雑であるが、要は平安朝式と鎌倉式との交響樂といへる。文學史上價値多く、後世文學に影響すること甚大。

〔お伽草子〕 狭義では、徳川時代享保頃、大阪心齋橋順慶町の書肆澁川清右衛門が揃ひの體裁で刊行した正文草子、以下二十三種の稱であるが、こゝは廣義の鎌倉末から徳川初へかけての短篇小説の汎稱である。代表的なものを分類すると童話(一寸法師等)、異類物(魚島平家、蟲歌合等)、本地物(貫船本地等)、佛教法

談物(さ、れ石等)、遁世物(朽木櫻、三人法師等)、繼子物(鉢かつぎ等)、戀愛物(横笛草紙、幻夢物語等)、歌物語(和泉式部等)、怪異譚(化物草紙、鶴の草子等)英雄譚(酒頭童子、鬼一法眼等)、復讐譚(あきみち等)孝行譚(二十四孝等)、祝儀物(七草草子等)等。内容は童話的で老幼婦女の慰み話(おとぎばなし)で、構想も類型的で思想も幼稚であるが、本質としては大衆文學である。過渡期的な産物で時代思潮と世想、説話研究の資料として貴重であり、又次の假名草子から浮世草子へと發展して行く新文學の萌芽として、文學史的價値が大きい。

〔謠曲〕 うたひとつといつて能樂の三要素の二である詞章をいふ。任務は演ずる能を一層引立たせる點にあつて、曲節と舞と共に重要である。當代の古典を重んじ傳統を尙ぶ時代相が謠曲にも現れてゐる。題材としては神事、歌人、武家物、復讐物、戀物語、支那の傳説で、朗詠、佛典、和歌、故事、成語を引用し、秀句法、縁語法、引用法等の修辭的技巧を用ひてゐる。補綴の文章である。思想は佛敎的厭世觀と他力による解説であり、鎌倉以來流布された新宗教を美的にした點にあ

る。次項能樂參照。

〔猿樂〕 平安時代及鎌倉時代に行はれた戲樂。「さるまごう」といふ。もと物真似に起り、滑稽な動作を多く交へたが、奈良朝頃から支那の散樂及雜藝をも採入れて漸次劇化されて來た。平安時代の末頃にはこれを專業とするものが現れ、神社、寺院の祭儀に行はれるやうになつた。これ等の専門家は各所に座を作つて住んだ。鎌倉時代からその内容が全く劇化するに至り、これを猿樂能といひ、室町時代に至つて能樂と化し、古い滑稽を主旨した猿樂は狂言と稱するに至つた。

〔觀阿彌〕 伊賀國杉内の人。結城三郎清次のこと。足利三代將軍義滿に仕へ、童坊の役を勤め、觀阿彌と改む。能樂を改正隆盛させ現存全曲中十四曲の謠曲を作り、子世阿彌、孫音阿彌相繼いで大成し、それを觀世流と呼んだ。子孫續き徳川時代は能役者の首席であつた。應永十三年(一〇六六年)歿、年五十二。

〔世阿彌〕 結城元清のこと。父と共に足利三代將軍の義滿に仕へ、父よりも樂才文才に秀で、現存全曲中二十二曲の謠曲を作り、又改作し觀世流の大成者となつた。花傳書、五音曲條々、能役者以下の名著がある。

〔傳説や云々〕 八島、田村等は英雄傳説、天鼓、雲林院等は技藝傳説で三番能の修羅物に多い。夕顔、葵の上、須磨源氏、右近等は源氏物語から材料を取つてゐる。

〔狂言〕 雜樂の一種。能狂言とも間狂言ともいふ。滑稽諧謔の事を演ずる戲藝で中古の猿樂の遺流である。能が佛敎的悲哀を主とした眞面目なもので、貴族的でロマンチックで、表現が婉曲で、詞章の多くが歌曲であるのに對して、狂言は滑稽諷刺を主としてゐて、民衆的で、リアリスチックで、端的明快で、純然たる當時の口語で綴られてゐる等といふ差異がある。狂言が能に伴なふ間劇として附隨するやうになつたのは、能が悲哀に傾き、單調であるので、滑稽の一齣を加へて變化させるために因る。で、能が足利義滿の頃に發達し、豊臣秀吉の頃に大成したとすれば、狂言もその頃に完成されたと見られる。地の文がなく對話のみであるから、謠曲よりも却て純粹な脚本に近く、劇的要素が多い。現存は約二百番で、祝言物、大名物、僧侶物、山伏物、聲入物、片輪物、盜賊物、鬼神物、仕舞狂言等に分類され、材料は從來の貴族武士の有識階級

のみでなく、民衆的な下層階級に取材し、人物は七福神、幽靈等の超自然的人物と爲朝等の史的人物と現世的人物との三種に分れるが、第三のもの多く、大名、冠者、僧、山伏、百姓、片輪者、盜人等がある。要するに現實的な社會喜劇。和泉、大藏、鷲の三流がある。

〔この時代の口語〕 甚う喜ぶ、心得ておじやる、詠まつしやれませい、なかなか、どこもとに居るぞ、じやまでい、等。

挿圖筆者略傳

橋本雅邦 (一八頁) 日本畫家。名は長郷、江戸の人。

狩野雅信に學び、勝園雅邦と號した。幕末維新の際國內騒然として人の畫事を顧みる者なく、窮迫最も甚だしかつたが、明治二十一年東京美術學校が創立されるやその教職につき、尋いで帝室技藝員に任ぜられた。後日本美術院を起し、大いに斯界の爲につくした。明治四十一年歿、年七十四。

寺崎廣業 (一九頁) 氏は明治時代の日本畫の大家。秋田の人である。名は徳卿。秀齋、天籟山人の號もある。初め郷里の狩野派畫家小室秀俊に學び、明治二十二年上京。平福穂庵に就き刻苦して和漢の丹青を究め、遂に一家の風を成した。東京美術學校教授、文展審査員となり、明治畫壇にその名聲を博した。晩年信州上村温泉の風光を愛して多くここに移り、大正八年歿、年五十四。後、門人、その所在を寺として廣業寺といふと。

内藤東甫 (四〇頁) 傳未詳。

昭和十三年十月一日印刷
昭和十三年十月十五日發行

新修國文 教授資料

(一卷—十卷)

非 賣 品

著 者	富 山 房 編 輯 部 東京市神田區神保町一丁目三番地
發 行 者	合 資 會 社 富 山 房 同 所 富 山 房 社 長
代 表 者	坂 本 守 正 東京市小石川區西古川町二十五番地
印 刷 所	中 外 印 刷 株 式 會 社

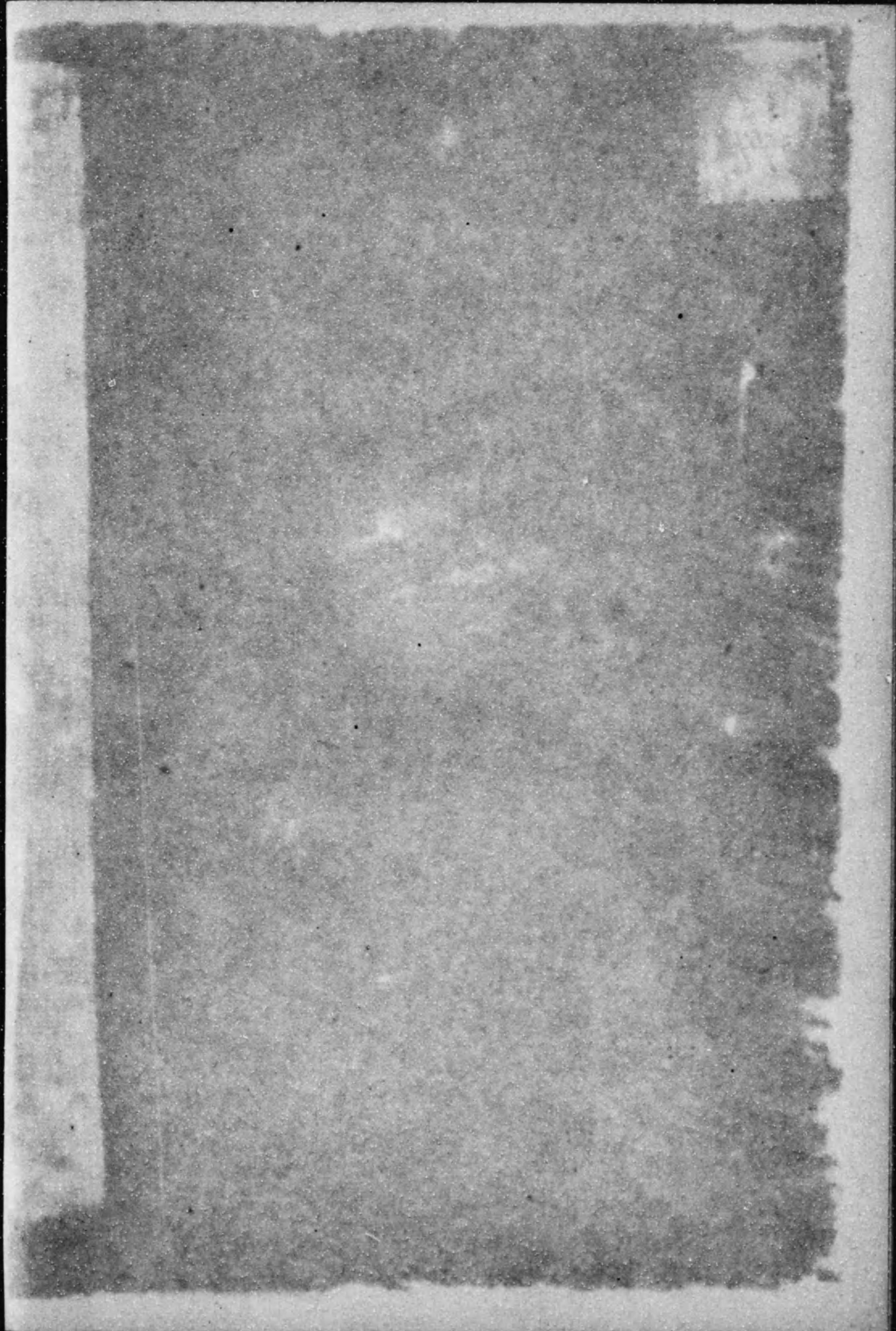
發 行 所

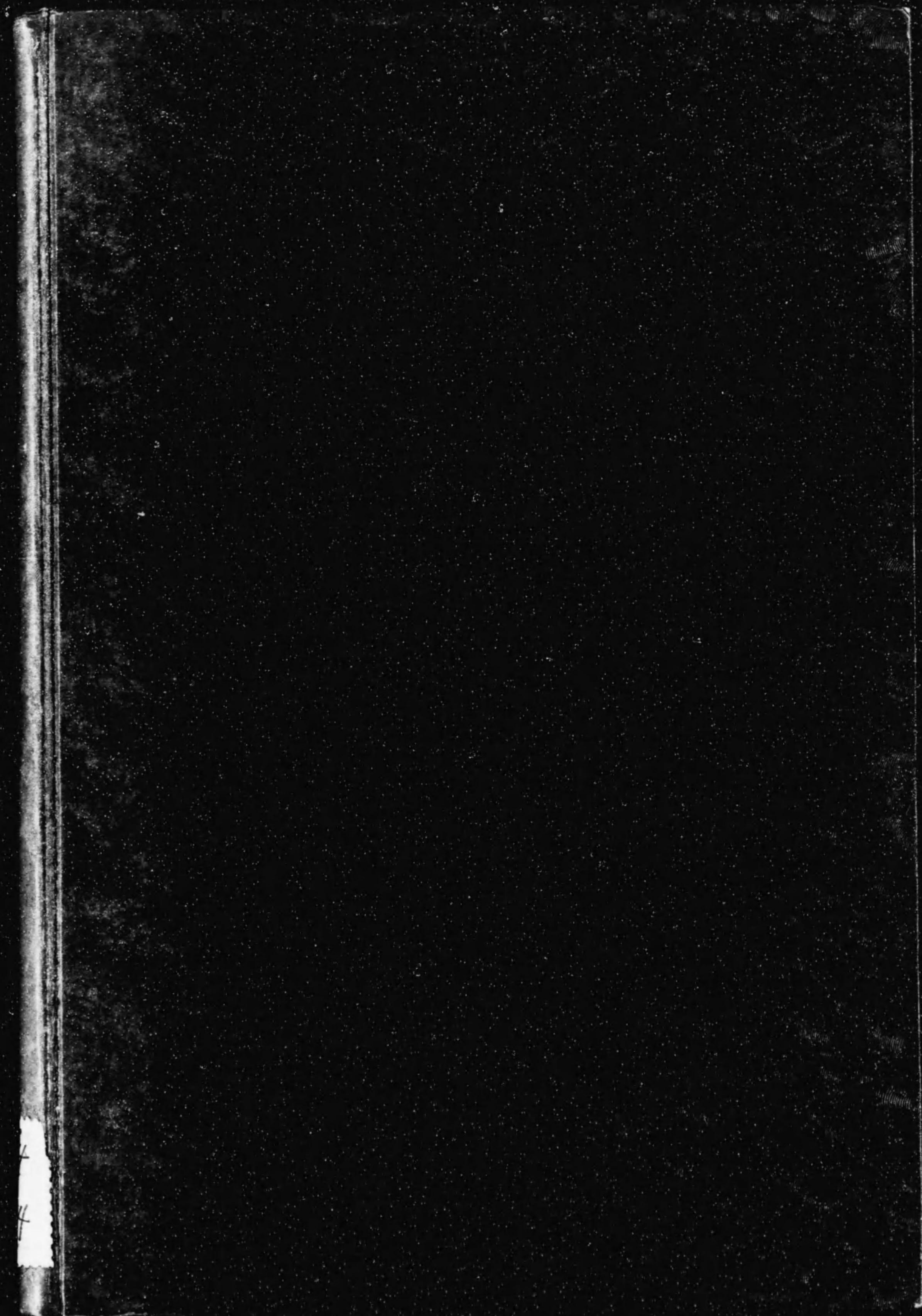
東京市神田區神保町一丁目三番地
合 資 會 社 富 山 房

電話神田二七一八番
攝 替 東 京 五〇一 番

第一編		第二編		第三編	
卷	目次	卷	目次	卷	目次
第一卷	總論	第一卷	總論	第一卷	總論
第二卷	...	第二卷	...	第二卷	...
第三卷	...	第三卷	...	第三卷	...
第四卷	...	第四卷	...	第四卷	...
第五卷	...	第五卷	...	第五卷	...
第六卷	...	第六卷	...	第六卷	...
第七卷	...	第七卷	...	第七卷	...
第八卷	...	第八卷	...	第八卷	...
第九卷	...	第九卷	...	第九卷	...
第十卷	...	第十卷	...	第十卷	...

384
344





4
4